

月刊紙『隊友』から見る1980年代の 自衛隊退職者団体隊友会と自衛隊史

津田 壮章

京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程
立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチ・アソシエイト

第1章 はじめに

自衛隊退職者にとって、1980年代はどのような時代だったのだろうか。世界的な安全保障をめぐる状況としては、1979年のソビエト連邦によるアフガニスタン侵攻を契機としてアメリカとソビエト連邦の関係が再び緊張状態となり、第二次冷戦、もしくは新冷戦と呼ばれる時代に入っていた。シーレーン防衛によるソビエト連邦封じ込めという日米協力が進展し、佐道明道が「日米防衛協力における海上自衛隊の活動が突出していた」¹⁾と指摘するように、国土防衛やベトナム戦争の後方基地としての位置付けから、徐々に日米協力の負担が求められつつある時代となっていた。

1990年代にはソビエト連邦の崩壊や、PKOに関する議論が本格化したことで、国土防衛以外の任務が増加していく。雲仙岳噴火や阪神・淡路大震災による災害派遣は、自衛隊に対する国民の支持を後押しした。また、国内政治では55年体制が崩壊し、社会党が自衛隊を合憲と認めたことで、その存在自体が争点となる時代は終わったといえる。1980年代は、この大きな枠組みの変化が起こる過渡期である一方で、国内の経済状況から自衛隊が争点として浮上しにくい時代であった。

筆者は、拙稿²⁾において、自衛隊退職者団体隊友会の発足から約20年間の基本的なデータ及び、防衛庁との関係や隊友会自体に関する議論を整理した。隊友会は自衛隊退職者を正会員とし、現職自衛

官の大半が賛助会員として加入する団体であるが、会の運営については一枚岩ではなかった。特に議論が頻発するのは、会の目的や方針について、「国民と自衛隊とのかけ橋」と「親睦と相互扶助」のどちらを優先するかということであった。1960年代後半に前者の優位が決定されるものの、その後も親睦・福祉事業は増加していく。70年安保の際には、安保闘争に対抗する形で政治的言動が活発化するが、1974年に2代目会長の江崎真澄が就任してからは、政治家や財界、芸能関係者、宗教者等との対談記事が連載されるようになり、有力者へ自衛隊への支持と理解を求めていく結節点としての活動が増加していく。1970年代の隊友会機関紙『隊友』には憲法への批判もみられるが、既に解釈改憲が定着していたことで積極的な運動の呼びかけには至らず、講演会事業を中心とした世論喚起が重視されていた。このように、1960年代、70年代の隊友会は、自衛隊と市民社会の中間という位置にあることで、当事者性を持ちながらも政治的な影響力を發揮する基盤を形成してきたことを明らかにした。

本稿は、その継続研究として、隊友会の動向を1980年代の自衛隊史、特に市民社会へ自衛隊が浸透していく過程の中に位置付けることを目的としている。主な調査対象として『隊友』を用い、隊友会員が抱いてきた社会や国家への認識や、当事者運動の言説を分析する。『隊友』には、「自衛隊の代弁者」を自負する隊友会員の主張や論争が体形的に掲載されており、自衛隊で過ごした者の意識を知るの

に適した資料として、主要論説欄等の目録を、「表3 1980年代の『隊友』における主要論説、解説、ルポ、インタビュー、講演録欄リスト」として末尾に掲載している。

第1節 先行研究の整理

自衛隊を対象とする研究は、大きく以下のように分けることができる。

- 1、制度史、政治史を中心とした歴史学研究
- 2、法理論や事件、自衛隊の動向を題材とした憲法学研究
- 3、自衛隊の研究機関によるオーラル・ヒストリーや作戦研究、運用研究等
- 4、自衛隊に関わる人や、社会との関係性を扱う研究
- 5、シビリアン・コントロールに関する研究

1の制度史、政治史に関しては、佐道明広³⁾や中島信吾⁴⁾、柴田昇芳⁵⁾らの研究が挙げられる。こうした防衛政策の過程に対して、隊友会は当事者団体として影響力を持とうとしてきた。しかし、隊友会を自衛隊の制度史、政治史に位置付けた研究はみられない。

2の憲法学に関しては、拙稿⁶⁾で指摘した通り、訴訟当事者としての隊友会が取り上げられることがあるものの、隊友会自体に関心は向けられていなかった。

3の自衛隊機関による研究では、近年、隊友会会長・理事長・副会長・本部理事に就任経験のある岡部文雄、源川幸夫、堀江正夫、増田好平、村木鴻二、中村龍平、西元徹也、竹田五郎、富澤暉、吉田學ら、元高級幹部自衛官のオーラル・ヒストリー研究が増えている。この他に、政策研究大学院大学のものとして、大賀良平のオーラル・ヒストリーがある。

4の研究で自衛隊の刊行物や当事者への調査を用いたものが、近年、社会学分野等で増えてきており、以下、特徴的な研究を挙げる。

戦後日本の平和観・戦争観を独自のインターネット調査を用いて分析した吉田純は、現代日本における広義のミリタリー・カルチャーを、①ポピュラー・カルチャー、②マスメディア（ジャーナリズ

ム）、③教育（学校・社会教育）、④軍事組織（自衛隊・アメリカ軍）の文化の4つに分け、「市民の戦争観・平和観を中核として、それと構造的に相関しあう①②③④の4つの文化的要素から構成される諸文化の総体」⁷⁾と定義している。このように、日本におけるミリタリー・カルチャーを広く捉え、自衛隊という軍事組織の中で形成される文化がその他の文化と相互に関連するものと位置づけた点は、自衛隊が映画⁸⁾やSNS等⁹⁾のメディアを利用し、または利用されることで広報を推進している現状の理解に必要な視点といえよう。また、自衛官は、居住地が施設内か外かの違いにもよるが、生活の大半を自衛隊施設の中で過ごし、言葉や行動様式、階級制度、体系的な自衛官としての教育プログラム、内部流通の雑誌類といった言論空間等、自衛隊の外とは異なる文化空間に長時間身を置くこととなる。こうした自衛隊という軍事組織の文化で過ごした経験は、隊友会員の言説や地域で各分野に浸透していく過程にも影響を与えていたといえよう。

自衛隊の協力団体を研究対象としたものとして、北海道南西沖地震において、北海道奥尻町の自衛隊と自衛隊協会の関係が災害派遣に与えた影響を分析した関孝敏¹⁰⁾が挙げられる。地域の協力団体の存在や日常的な交流が、災害時の情報共有や災害派遣を円滑に進める要因になることを示した研究であるが、奥尻島に所在するのが航空自衛隊の分屯基地という小規模施設であることと、離島であるという条件からも、一つの特例事例として考える必要があるだろう。

5のシビリアンコントロールに関しては、後述する竹田五郎統合幕僚会議議長（当時）のインタビュー記事等、自衛官による政府見解と異なる発言を問題視するもの他、有事法制、自衛隊の組織機構等で主にジャーナリズムの関心を引き付けてきた。研究史においては、防衛研究所第一研究部第一研究室長（当時）であった西岡朗が、日本におけるシビリアン・コントロールの制度やそれに対する各種批判を整理し、機構改革や自衛官の処遇改善提言をおこなった研究が特筆できる。ここでは、「自衛官が政治統制にこだわりなく服することができる第一の、

唯一といってよい条件は、政治の安定と政治の側における優れたリーダーシップ¹¹⁾としたうえで、シビル機関への自衛官の配置、内閣総理大臣の副官として自衛官を配置、隊長職に対する手当の改善、自衛官の処遇改善問題を扱う第三者機関の設置等¹²⁾が提言されている。こうした提言は、後述する自衛官の処遇改善を求める『隊友』紙上の言説と、時期や内容から考えて連動するものであったといえよう。しかし、西岡のように、日本におけるシビリアン・コントロールに関する具体的な提言がなされることは稀であった。

シビリアン・コントロールを直接扱う研究ではないものの、再軍備以降、防衛出動による戦死のリスクが常にあったにもかかわらず、自衛隊を使う側の国民が「未来の戦死」に向き合っただけでこなかったことを指摘する井上義和の研究¹³⁾は、自衛隊にまつわる議論に欠落していた「未来の戦死」へ向き合う必要性を述べる。こうした指摘は、自衛官が「戦死」のリスクを常に負ってきた一方で、それに向き合っただけでこなかったコントロールする側に対する不満が噴出したといえる竹田や栗栖弘臣の発言¹⁴⁾にみられるような、コントロールする側の意識と自衛官の意識にある溝が、未だに埋まっていないことを示している。

隊友会は、これらの全てに関連している。1、2、5に関しては、当事者性を持つ団体として、その論争に関わってきた。近年では、3のようなオーラル・ヒストリー研究で、隊友会役員を務めた元自衛官が研究対象となることも多い。4の研究動向は、自衛隊退職者として地域社会と密接に関わり、「国民と自衛隊とのかけ橋」を会の目的に掲げる隊友会にとって切り離せないものである。自衛隊という軍事組織の文化を経験し、そのアイデンティティを退職後も有し続けていた自衛隊退職者が、地域社会との落差に葛藤しながらも、徐々に浸透していく過程に隊友会は関与してきた。本稿は、こうした先行研究の動向を踏まえながら、1980年代の隊友会に焦点を当て、隊友会の活動を自衛隊史に位置付ける試みである。

第2章 1980年代の隊友会と『隊友』の紙面動向

第1節 会勢と『隊友』の紙面動向

1980年代は、隊友会に最も多くの正会員が加入していた時代であった。正会員数、賛助会員数、『隊友』発行部数等は「表1」の通りである。正会員の新規加入者数及び退会者数は「表2」に記載した。年間1万人以上が新規加入する一方で、毎年5,000人を超える退会者があった。退会者の主体は「会費未納者及び住所が確認できないため連絡不能となった人」¹⁵⁾とされている。正会員数は増加していくものの、会費徴収は1981年時点で、「最近二年間の平均実績は、会員（即日入会者を除く）約十万五千百名に対して、約二万五千五百名であり、二四%に過ぎない」¹⁶⁾とされる状況であり、会費を納める会員の少なさが目立つ。

正会員の増加には、1966年に制定された、「年会費の十年分以上を一回で納入した者は終身その会費を免除する」¹⁷⁾という終身会員制度と、1972年から始まった、「退職者の入会申込み及び会費の徴収事務を退職する部隊で行い、これを一括して隊友会本部へ送付」¹⁸⁾する即日入会制度の運用が軌道に乗ったことが影響していた。正会員の会費は、発足当初、年額1口100円を1口¹⁹⁾とされていた。1966年に3口が基準と変更²⁰⁾され、1972年に5口、1974年に10口、1978年に15口、1983年に20口と増額²¹⁾していく。1981年時点で、「終身会費を納入した即日入会者は、一万六千名」²²⁾いたとされる。

終身会員制度は、一括でまとまった会費収入を得られる一方、デメリットもあった。隊友会理事（当時）の高田安董は、「終身会費を徴収した年度に消費し、一方終身会費は累積して年々増加し、事務経費は自転車操業を繰り返す」²³⁾として、終身会員制度の問題点を指摘している。1983年には、終身会員制度による財政逼迫の改善策として、「必要に応じ入会后10年を経過した終身会員に対し、年会費を基準として会運営費の一部の負担を求めることができる」²⁴⁾ように「会費徴収等に関する規則」が

表1 『隊友』発行部数、防衛庁買上り部数、賛助会員配付部数と隊友会正会員数、賛助会員数

年度	発行部数	防衛庁買上り部数	賛助会員配付部数	正会員数	賛助会員数
1959		15,000		11,027	84,893
1960				12,141	120,413
1965	70,000			69,446	191,998
1970a		18,900		98,498	190,600
1970b	85,000	20,900	13,500	100,680	
1975	87,000	24,500	13,500	84,784	
1980	100,000	23,500	14,646	114,449	
1981	102,085	23,500	14,646	118,841	
1982	101,734	23,500	14,646	119,924	
1983	104,714	23,500	14,646	123,095	
1984	107,260	23,500	14,646	129,892	
1985	112,650	23,500	14,646	135,097	
1986	116,000	23,500	14,646	140,034	
1987	119,200	23,500	14,646	141,064	
1988	123,900	23,500	14,646	146,959	
1989	126,400	23,500	14,646	149,866	
2000				132,747	229,515
2005				129,309	225,223
2009	134,200			87,833	221,504
2015	119,200			74,549	173,019

(注1) データの無い項目は空白としている。

(注2) 1970年度は『社団法人隊友会十年史』と『社団法人隊友会20年史』で数字が異なるため、『社団法人隊友会十年史』の数字を「1970a」、『社団法人隊友会20年史』を「1970b」とした。

(注3) 1980年代以外は、主に5年間隔でデータのある年度を掲載した。1960年代、70年代については、以下に掲載している。津田壮章「1960、70年代における自衛隊退職者団体隊友会の動向——月刊紙『隊友』から」『立命館平和研究21号』（2020）、45頁。

出典：社団法人隊友会『社団法人隊友会十年史』（1973年）12頁、47頁、49頁、52頁、162頁、隊友会事務局『社団法人隊友会20年史』（1980年）28-29頁、38頁、86頁、社団法人隊友会『社団法人隊友会三十年史』（1990年）156頁、376-377頁、隊友会50年史編纂委員会編『隊友会50年史』（2011年）55頁、58頁、116頁、「平成28年度定時総会 第一号議案 平成27年度事業報告（案）」より筆者作成。

表2 1980年代の正会員新規加入者数及び退会者数

年度	新規加入者数	退会者数
1980	12,700	5,700
1981	10,300	6,000
1982	9,600	8,500
1983	11,500	8,400
1984	11,800	5,000
1985	13,300	8,100
1986	12,600	7,700
1987	11,800	10,700
1988	11,200	6,300
1989	10,800	7,900

(注1) 100人以下を省略した数字となっている。

(注2) 1988年度は差し引きした数字と表1の数字に約1,000人の差異が発生するが、出典に掲載された数字をそのまま記載している。

(出典) 社団法人隊友会『社団法人隊友会三十年史』（1990）、109頁より筆者作成。

改正された。しかし、終身会員制度自体は継続され、全会員に対する終身会員の構成比率は、1989年「期末には27%に達した」²⁵⁾と、増加していく一方であった。

本部役員人事は、1970年代に引き続き、元将官

を中心としたものである。自衛隊在職時の階級と隊友会の役職については、隊友会会長（当時）の江崎真澄と複数の支部連合会会長との対談記事で、山梨県支部連合会会長（当時）の生原将男が、「隊友会には、階級はないと思います。階級意識が少しでもある県連は、前進しませんよ。隊友会がはつらつと発展するためにも、ぜひ若い層からも理事を出すようにしてもらいたい」²⁶⁾と述べ、江崎は「やる気のある有能な人材はどしどし登用すべきです」²⁷⁾と返している。しかし、実際の役員人事では、支部や支部連合会といった地方組織には曹・士階級出身役員がみられるものの、本部役員は元幹部が大半を占めていた。1980年1月15日付『隊友』の新年挨拶欄に掲載された本部役員一覧には、名誉会長1人、会長1人、副会長4人、常務理事10人、理事18人、幹事3人、理事（援護本部）3人の合計40人²⁸⁾が記載されている。この中で、政治家2人と内局出身者1人を除く37人中、自衛隊在職時に佐

官以上の幹部であったと確認²⁹⁾できた者は32人である。その内、同様の方法で在職時に将や将補であったと確認できた者は29人であった。

副会長人事は、1980年度にそれまでの各自衛隊幕僚長経験者が就任する形から大きく変わる事となる。1980年度に元防衛事務次官の丸山昂が副会長に就任し、1984年度から元防衛事務次官の原徹、1988年度から元防衛事務次官の吉野實に交代する形で、元防衛事務次官が元各自衛隊幕僚長と同列の副会長に就任³⁰⁾している。

1980年代を通じて『隊友』に連載される特集記事として、「時の動き」欄が挙げられる。隊友会副会長が日本に関連する軍事情勢を解説する記事で、隊友会員に詳細な情勢認識の共有を図る目的があったと考えられる。この他に、1975年4月15日付『隊友』から「年金ガイド」欄が、1980年4月15日付からは医学博士で隊友会大阪府支部連合会名誉会長の堀田耕三による「隊友のための健康相談室」欄が開始され、どちらも長期連載となる。こうしたコーナーは、自らの年金や健康に関連する記事の需要が隊友会内に一定数存在したことを示しているといえる。

福祉の充実を求める声は、1980年代にも多くみられる。隊友会の「各支部連合会で、老・壮・青年各層にわたり十五人の会員を選定」³¹⁾し、合計765人の会員を対象として420人から回答を得た『隊友』紙面についてのアンケートでは、「連載もので興味をもって読むもの」が、「時の動き」48.3%、「年金」37.6%と、防衛関連の連載記事が最も興味を持たれていたものの、「年金」の関心も高い。「今後の努力すべき方向」という問いに対しては、「自衛隊退職者の親睦、福祉の増進」54.8%、「防衛思想の普及、自衛隊への協力」39.8%という結果であった。

隊友会内に親睦・福祉を求める声が強硬な一方で、「行動する隊友会」が語られることも多い。1987年5月27日におこなわれた長崎県支部連合会総会で連合会長が「隊友会は、単なる親睦団体であってはならない。国民の防衛に関する意識の高揚を図ることが隊友会の務めであることを一人ひとりが自覚し

て行動に移さなければ存在の価値がない」³²⁾と挨拶する等、隊友会の特殊性が度々強調される。こうした隊友会の性質をめぐっては1960年代から議論されており、親睦・福祉よりも「国民と自衛隊とのかけ橋」としての活動を優先する方針³³⁾とされている。しかし、1980年代にも親睦・福祉より隊友会の目的の重要性を語る言説が見られることは、親睦・福祉を求める声が続く存在し、1960年代の議論が、この時期の隊友会員の中で実質化されていないことを示しているといえよう。

第2節 隊友としての自己認識

隊友会員の隊友会についての自己認識はどのようなものであったのだろうか。社団法人日本郷友連盟³⁴⁾と隊友会双方の役員であった味岡義一は、当時、隊友会の加盟を要請していた世界在郷軍人連盟(World Veterans Federation)について、日本から唯一加盟していた日本郷友連盟が、「当面、W・V・Fへの加盟を継続しながら、隊友会への引継ぎを考えているようであり、何れにしても、名実共に“EX - SERVICE MEN”の主体をなす隊友会として、逐次国際活動を強化すること」³⁵⁾を求めていた。ここでは、隊友会が「“EX - SERVICE MEN”の主体」として位置付けられている。

味岡のように、日本郷友連盟と隊友会の役員を兼任する者もいる。隊友会茨城支部連合会副会長で日本郷友連盟理事兼茨城支部副会長(当時)の小林利は、「日本郷友連盟と、我が国の平和と発展に寄与する目的を持つ隊友会が一体化すれば自衛隊の盤石な後継となると信じます。早期実現を熱望する。因みに茨城の隊友の主要役員は皆郷友会に入会している」³⁶⁾と述べ、日本郷友連盟との一体化を求めている。また、宮崎県では、「県内には、既に郷友と隊友が一体となって郷友連盟の事業を継承している支部もある」³⁷⁾とされるように、地域によっては非常に近い関係にあった。日本郷友連盟と隊友会の関係は、1960年代から友好団体³⁸⁾と位置付けられているが、隊友会本部としての合併には至っていない。

『隊友』には、自衛官の社会的なステータスの低

さを指摘する投稿も多い。政府内の国防の位置付けについては、竹田五郎が統合幕僚会議議長在職時に大平正芳首相の「葬儀が日本武道館で行われたとき、われわれの席は、三階の一番奥でした」³⁹⁾として、幹部自衛官の処遇の悪さを指摘している。

1年に1度、隊友会から防衛庁長官に提出される要望書には、自衛官の処遇改善が頻繁に掲載されている。1979年の要望書には、自衛官の指定職の拡大と基準号俸の格上げの他、若年定年制により他の公務員と比べて不利になる栄典基準や退職手当に関して、「今後若年停年の特殊性について、何等かの特別措置をご検討いただくか、または再就職のための援護施策に格別の配慮」⁴⁰⁾を求めている。また、賞じゅつ金制度⁴¹⁾についても、「警察官の殉職の場合に比し自衛官はその支給総額において大きな差」⁴²⁾があることを指摘し、改善を求めている。こうした要望を一部抜粋⁴³⁾すると、1982年に「殉職隊員の遺族補償の強化」、1983年「長期勤務者に対する功労金」、1984年「予備自衛官手当の増額」というように、要望書に項目が追加されていく。自衛官の処遇改善は、その仕事に対する予算配分という形で、目に見える地位の向上を意味する。こうした活動は、自衛官の不満を当事者の要望としてまとめて防衛庁に提出することで、自衛官ができない処遇改善を求める運動体の役割を果たしていたといえる。

第3章 自衛隊をめぐる議論と隊友会

第1節 防衛政策と隊友会

1976年10月に閣議決定された「防衛計画の大綱」は、「基盤的防衛力」という概念を取り入れ、1980年代以降の防衛政策を規定してきた。「防衛計画の大綱」が作られた背景について、防衛庁内の議論を考察した真田尚剛は、1970年代の世論調査で自衛隊の必要性について好意的な結果が示されている一方、雫石事故や長沼ナイキ事件の一審違憲判決、革新陣営の伸長、各地で起きる反自衛隊活動といった事象が、「防衛政策と自衛隊の正当性の揺らぎへ

の対応として、防衛力構想を防衛力整備の前提条件とともに国民へ示すべきとの認識を共有」⁴⁴⁾するきっかけであったと指摘する。

真田は、「防衛計画の大綱」策定過程で久保卓也防衛事務次官（当時）の脱脅威論⁴⁵⁾に制服組だけでなく内局からも批判があり、防衛課は低脅威論を前提とした「常備すべき防衛力」構想を進めていたとする。しかし、久保が1976年版『防衛白書』で「防衛力の意義」や「基盤的防衛力」について、「防衛力を保持する意義は、有事において戦うことにあるというよりも、平和維持のために機能することにある」⁴⁶⁾、「わが国の防衛力は、いわば平時の防衛力ともいうべきものであって、特定の差し迫った侵略の脅威に対抗するというよりも、全体として均衡のとれた隙のないものであることが必要である」⁴⁷⁾と記述したことが、「久保による白書の記述が新構想の説明として認知された」⁴⁸⁾要因であったと述べている。また、制服組による議論では、「脱脅威論などに反発する一方、それに対抗する新構想を生み出せなかった」⁴⁹⁾としている。

「防衛計画の大綱」は、坂田道太防衛庁長官（当時）の私的諮問会議「防衛を考える会」や防衛庁、各自衛隊幕僚監部の議論を経て策定されたものであるが、脱脅威論を前提とすることへの批判⁵⁰⁾が制服組だけでなく、元内局幹部からもみられる。1980年代に入ると、デタントの時代に作られた「防衛計画の大綱」について、見直しを求める記事が『隊友』にみられた。そこには、軍事的合理性の視点や国土防衛を任務とする自衛隊出身者としての危機感があった。元防衛事務次官で隊友会副会長（当時）の丸山昂は、1982年度の防衛予算編成について、「『アメリカにいわれるから防衛費を増やす』という考え方が支配的になって、『日本の国を守ることは日本国民の問題であって、日本国民が考え、日本国民が行動しなければならない』という防衛問題の本質が見失われ勝ちになる（中略）国防会議は毎年の防衛予算を承認する以外には、『大綱』の依って立つ前提たる国際情勢について検討することをしていない」⁵¹⁾と述べ、「防衛計画の大綱」が前提とする国際情勢と現実の情勢の乖離を指摘し、

「防衛計画の大綱」の再検討を求めている。

こうした状況は隊友会として見過ごせないものとなっており、1983年には、防衛庁長官への要望書で「防衛計画の大綱」の見直しを要望している。要望書では国際情勢の変化を述べたうえで、「隊友会会員一同も『脱脅威論的防衛構想』から速かに脱却されることを希求しておりますので、『五十九中業』の検討にあたられば『防衛計画の大綱』の見直しを是非実現していただくようお願いします⁵²⁾」として、「防衛計画の大綱」を脱脅威論的と位置づけ、構想の見直しを求めている。しかし、「基盤的防衛力」に対抗する新構想が提案されたわけではなく、1985年の中期防衛力整備計画は、「防衛計画の大綱」（昭和51年10月29日国防会議及び閣議決定）の基本的枠組みの下、これに定める防衛力の水準の達成を図ることを目標⁵³⁾とするものと位置付けられ、「基盤的防衛力」が維持された。

この時期の防衛政策について、国民意識と自衛官の意識との乖離が示された事例として、竹田五郎統合幕僚会議議長（当時）の言動が挙げられる。竹田は雑誌『宝石』1981年3月号のインタビュー記事で、専守防衛の「戦いにくさ」や国土を戦場とするリスクについて指摘した他、徴兵制を違憲とする政府見解の理由の一つが憲法18条の「意に反する苦役」であること及び、「防衛力整備の実施に当たっては、当面、各年度の防衛関係経費の総額が当該年度の国民総生産の100分の1に相当する額を超えないことをめどとしてこれを行う⁵⁴⁾」と1976年11月5日に閣議決定された、防衛費の「GNP1%枠」に対する批判的見解を述べた。これが国会で問題視され、最終的に統合幕僚会議議長を辞任することになる。

この件について隊友会では、『隊友』編集長による「いわゆる“竹田発言”問題につきご本人の真意等⁵⁵⁾」を聞くとするインタビュー記事が掲載される。ここでは、上記3つの論点について、「軍事原則的に専守防衛は戦いにくいし、国土戦になることは間違いないのですから、正しいことを正しいとただだけ」、「国を守るということは一般職と違った崇高な使命であるということ、そして国民の自衛隊で

あることを強調したかった（中略）自衛隊反対勢力が隊員の募集などについて、十八条など政府の論拠を悪用しないように先手を打っておくという気持もありました」、「大蔵省レベルになると、パーセンテージばかりいって、防衛の中身がどうなるのか、能力が上るのか、下るのか、そういうことが真剣な話題になったことがない⁵⁶⁾」と発言の意図を述べている。また、竹田は、防衛研究所戦史部によるオーラル・ヒストリーで、「私は現職時代から、ああいう質問があつたらああいう答えをすと思いません。シビリアン・コントロールに違反しているとは思いません⁵⁷⁾」としたうえで、自衛官も、「『それをやればこういう非合理性があるから、軍事的には不利になる』ということは、言うべきだと思うんですね⁵⁸⁾」と、自衛官が軍事の専門家として発言する必要性を指摘している。

元陸上幕僚長で隊友会副会長（当時）の三好秀男は、竹田発言が問題視される過程で実現しなかった、「防衛上の重要な問題につき、制服に議会証言の機会を与えること⁵⁹⁾」の必要性を述べる。栗栖弘臣の「超法規発言」を契機に有事法制議論の活性化や制服組の権限強化を要望⁶⁰⁾した時と同じく、竹田の述べた争点の議論に加え、制服組の権限強化に繋がりたい意図があつたといえよう。その後、竹田は1984年から隊友会副会長に就任し、「GNP1%枠」についての批判が『隊友』で度々言及される。三好は「GNP1%枠」について、「国防会議以上のレベルにおける、主として政治的な判断からなされたものであろうが、軍事的合理性の立場から積み上げた結果ではなかった⁶¹⁾」と批判し、「GNP1%枠」撤廃を求めている。1987年1月24日に閣議決定された「今後の防衛力整備について」では、「GNP1%枠」に代わり、「各年度の防衛関係経費については、同計画に定める所要経費の枠内でこれを決定する⁶²⁾」として総額明示方式が採用される。しかし、沓脱和人によると、「GNP1%枠」撤廃後も防衛費がGNP1%を超えたのは1987年度から1989年度の3年間⁶³⁾のみであり、実質的に「GNP1%枠」が基準として残っていたといえる。

制服組の権限や役割を強化する提案も多い。元海

上幕僚長で隊友会副会長（当時）の内田一臣は、個人的見解としながら、「防衛庁・自衛隊を指揮できる総理の司令部を設置されるべきことである。これと隣り合わせに、同じく新設の幕僚機関の一たる国家安全保障会議を置くのが便利」⁶⁴⁾と、有事における司令部や情報連絡機関の設置を求めている。このような機構改革は、制服組の発言や活動の場を広げることに繋がり、自衛官の地位向上と直結していた。こうした議論で強調されるのは、防衛政策における軍事的合理性の視点や政府内において自衛官を重用することの必要性であり、『現代のシベリアン・コントロール』で西岡が提言した自衛官の処遇改善内容とも関連するものであった。『隊友』におけるこうした投稿の多さからは、自衛隊退職者という自由な言論が可能な立場でありながら、元高級幹部自衛官として専門家の性質を持つ人々が処遇改善を要求し、『隊友』の配布対象である防衛庁や政治家にも影響を与えることで、自衛官の代弁をする機能を持っていたといえる。ここで述べられる処遇改善は、他の公務員と比較した労働条件の改善にとどまらず、防衛政策への積極的な関与を志向するものであり、日陰者としての自衛隊を抜本的に変えていこうとする動きであった。しかし、自衛隊関係者からの要求の域を出ることはなく、1980年代の防衛政策を大きく変える力にはならなかった。

第2節 憲法議論と隊友会

1980年代の『隊友』において、明文改憲を求めようとする議論はそれほど多くない。1981年5月3日に名古屋市でおこなわれた「自主憲法制定国民大会」に江崎真澄が参加⁶⁵⁾したとする記事があるものの、隊友会からの参加者数は書かれていない。改憲運動に関連する記事が掲載された場合も、その行事の主体は隊友会ではなく、既成の運動や集会に参加する形が目立つ。1981年の隊友会定期総会では、江崎が挨拶で改憲の必要性を語るものの、「これを直ちに行うことは、いろいろ問題がありますし、まだ国民の十分な了解を得る段階に立ち至っていません。だとすれば、この憲法改正の問題をどうするか、——こういったことについても、自衛力の増強

問題についても、われわれ隊友会がもっともっと、国民と政府、防衛庁とのかけ橋となって働く、いろいろな大きな使命がある」⁶⁶⁾とするのみで、具体的な運動の呼びかけには至らなかった。

隊友会の総会で決議される年度事業計画に、「国民運動への参加」という項目がある。1980年の「五五年度事業計画」では、「北方領土返還運動」と「英霊に答える運動」の他、「友好団体との協力、連けいのため各種会合に参加」⁶⁷⁾とされている。1981年の「五六年度事業計画」では「市民防衛運動」⁶⁸⁾が、1985年の「六十年事業計画」からは「国旗掲揚運動」⁶⁹⁾が追加されている。しかし、1980年代の「国民運動への参加」項目に改憲を求める運動は記載されていなかった。

事業計画に毎年記載されている「北方領土返還要求全国大会」は、東京の九段会館で開催された1982年を例にとると、「本全国大会の実行委員である隊友会からも、東京（高橋事務局長以下十一名）神奈川（青山会長以下八名）千葉（富岡会長以下五名）埼玉（遠山副会長以下五名）の各都県連から有志が参加」⁷⁰⁾と、会員数に比べて参加者数はそれほど多くない。こうした運動へ積極的に参加していた地方役員から、「東京で開催される各種国民運動の全国大会、あるいはわが茨城における県民大会に参加しても、隊友会本部の役員、又支部連合会長以下の役員等の顔触れがほとんど見られないのは誠に残念至極」⁷¹⁾とする投稿があるように、隊友会全体として積極的な運動がおこなわれていたとはいえない状況であった。

全国的な運動への参加が呼びかけられる一方で、地域で会員が簡単に参加できる「国旗掲揚運動」も推進される。この運動は、1982年に「社団法人日本国旗掲揚推進協議会」では現在、国旗掲揚運動を推進中です。隊友会でもこの運動に協賛し⁷²⁾たとして、国旗セットの販売記事が掲載されたことを皮切りに、地方組織で徐々に活動がみられるようになる。1987年度の「事業計画」では、「特に国旗掲揚の運動を推進する」⁷³⁾と記載され、隊友会として本格的に「国旗掲揚運動」へ取組むこととなる。地域によっては、「支部の経費で国旗セットを購入し

て、無償で配布し、祝日には全会員の家庭が率先して国旗を掲げる⁷⁴⁾とする支部や、「営外居住隊員の各家庭に日の丸の旗を掲揚するよう有償頒布を行い(中略)少年工科学校を中心に百旗の国旗を頒布⁷⁵⁾と、自衛隊関係者を中心に協力要請をした県もあり、各地で積極的な活動がみられる。

個別の地域では、自衛隊や米軍の行動に対する反対運動へ対抗する運動をおこなう地方組織の記事が掲載されることがある。例えば、1988年に石川県の小松基地でおこなわれた基地包囲行動への対抗運動として、同年6月30日に小松基地友好団体連絡協議会が結成され、代表世話人に当時の隊友会小松支部長が就任している。ここでは、「一、小松市長に対する陳情。二、基地周辺市民に対する啓蒙。(広報タワーの設置、ほか)三、宿泊場所と予想される個所への申し入れ。四、マスコミの報道活用(資料の提供)五、小松基地隊員の激励(基地と市民との集い)」⁷⁶⁾の5点が主な活動とされている。

小松基地では1988年6月29日に、F-15Jの墜落事故⁷⁷⁾が起きており、1975年から続く「小松基地騒音公害訴訟」が係争中⁷⁸⁾であったことから、基地包囲行動を「傍観した場合、市民に与える影響も少なしとしない」⁷⁹⁾というように、地域世論への影響を懸念しての対抗運動とされていた。しかし、こうした運動は一部の地域に限定されたもので、外的な要因があった際にそれへの反応として形成される場合が多く、『隊友』に掲載されるものは全国的にみると稀であった。

第4章 おわりに

本稿は、自衛隊退職者についての基礎研究として、1980年代の隊友会の動向を機関紙『隊友』を用いて分析したものである。自衛隊に関する研究において、隊友会や外郭団体に対する注目度の低さから、基礎研究の積み重ねが今後の自衛隊外郭団体研究や戦後の在郷軍人研究に資すると考え、10年ごとの基本的なデータを示し、そのうえで隊友会に集まる人々の認識や問題意識を解き明かすことを優先した。

1980年代の隊友会は正会員数が毎年増加傾向にあり、自衛隊最大の当事者運動団体として、防衛政策や世論形成に積極的な関与を模索していた。しかし、退会者も多く、自衛隊退職者全体でみれば、正会員となって活動する者は少数派であった。『隊友』には、防衛政策や自衛隊に関する記事が多いものの、福祉や健康、年金に関する特集記事も複数存在し、隊友会に対するそうした需要が根強いことを示している。同窓会組織や親睦・福祉団体との性質の違いは、会の目的である「国民と自衛隊とのかけ橋」や、「国民運動への参加」に見いだされることが多い。しかし、事業計画で明記された「北方領土返還運動」等へ積極的に参加する者は会員数に比べてそれほど多くなく、地域で運動参加を推進する立場からの不満が『隊友』に掲載されることもあった。日本郷友連盟との親和性も高く、双方の役員を兼任する者もいたが、隊友会としての合併には至らなかった。

『隊友』には、防衛政策への批判も多くみられる。「防衛計画の大綱」で示された「基盤的防衛力」構想については、久保卓也の脱脅威論的な構想の内容が軍事的合理性の視点から許容できない立場にあるとして、隊友会として見直しが要望される。制服組だけでなく、元防衛事務次官として初めて隊友会副会長に就任した丸山昂からも見直しを求める批判があり、元制服組の抵抗と一括りにはできない。同時期には、竹田五郎の発言の一つである防衛費の「GNP1%枠」批判のように、防衛政策への自衛官としての不満が噴出したものもある。予算の増減は自衛官の労働条件に直結する問題でもあり、処遇改善を求めてきた隊友会にとって、「GNP1%枠」という制限の撤廃は重大な課題であった。隊友会としてその争点化を図り、改善を求める運動団体としての性質を持っていたが、防衛予算の大幅な増額や「基盤的防衛力」を変える力にはならなかった。

1980年代の隊友会は、このような自衛隊に関する諸問題の根本原因は憲法にあるとしながらも、1960、70年代と同様、組織として明文改憲を訴えることまではできず、防衛費の「GNP1%枠」撤廃や、自衛隊・米軍の行動に対する反対運動への対抗運動といった個別争点で自衛隊の支援をし、自衛官

の地位向上を求める方向の運動が進められた。隊友会は、自衛隊に最も近い当事者団体でありながら、現職と異なり自由な言動が可能な立場を活かし、時には自衛官の代弁をし、自衛隊の支持基盤としての活動で、防衛政策へ関与してきた。1980年代の政治に対する影響力は限定的なものであったが、徐々に組織を拡大しながら、防衛政策に対して自衛隊退職者としての要求を主張する団体として地位を確立していく時期であったといえよう。

【謝辞】

本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものである。最後に、本研究に対して貴重な資料を提供いただいた公益社団法人隊友会に厚く御礼を申し上げる。

【注】

- 1) 佐道明道『戦後政治と自衛隊』（吉川弘文館、2006）、160頁。
- 2) 津田社章「1960、70年代における自衛隊退職者団体隊友会の動向——月刊紙『隊友』から」『立命館平和研究 21号』（2020）、43-68頁。
- 3) 佐道明広『自衛隊史論——政・官・軍・民の60年』（吉川弘文館、2015）。
- 4) 中島信吾『戦後日本の防衛政策——「吉田路線」をめぐる政治・外交・軍事』（慶應義塾大学出版会、2006）。
- 5) 柴田昇芳『冷戦後日本の防衛政策——日米同盟深化の起源』（北海道大学出版会、2011）。
- 6) 津田、前掲、44頁。
- 7) 吉田純「なぜミリタリー・カルチャー研究をするのか」吉田純編、ミリタリー・カルチャー研究会著『ミリタリー・カルチャー研究——データで読む現代日本の戦争観』（青弓社、2020）9-10頁。
- 8) 自衛隊協力映画については、以下を参照。須藤遙子『自衛隊協力映画——『今日もわれ大空にあり』から『名探偵コナン』まで』（大月書店、2013）。
- 9) 自衛隊は、Facebook、Twitter、Instagramを中心としたSNSで、防衛省や統合幕僚監部、各自衛隊公式アカウントをはじめ、各地の地方協力本部や基地、駐屯地ごとのアカウントも開設している。
- 10) 関孝敏「激甚災害の初期段階における既成型組織の対応過程——自衛隊の救援活動を中心として」関孝敏・松田光一編著『北海道南西沖地震・津波と災害復興——激甚被災地奥尻町の20年』（北海道大学出版会、2016）23-40頁。
- 11) 西岡朗『現代のシビリアン・コントロール』（知識社、1988）、298頁。

- 12) 同上、304-308頁。
- 13) 井上義和『未来の戦死に向き合うためのノート』（創元社、2019）。井上義和「戦死とどう向き合うか？——自衛隊のリアルと特攻の社会的受容から考える」好井裕明、関礼子編著『戦争社会学——理論・大衆社会・表象文化』（明石書店、2016）、123-144頁。
- 14) 栗栖弘臣の「超法規発言」とその後の隊友会の動向については、以下を参照。津田、前掲、49-50頁。
- 15) 社団法人隊友会『社団法人隊友会三十年史』（1990）、108頁。
- 16) 高田安董「会費をめぐる諸問題」隊友 1981年11月15日付 6面。
- 17) 「会費徴収等に関する規則」社団法人隊友会『社団法人隊友会十年史』（1973）、524頁。
- 18) 隊友会事務局『社団法人隊友会20年史』（1980）、3頁。
- 19) 「隊友会規約 第九条」隊友 1959年7月20日付 2面。
- 20) 「社団法人隊友会第七回定期総会 会費に議論沸騰」隊友 1966年7月1日付 1面。
- 21) 隊友会事務局（1980）、前掲、10-11頁。社団法人隊友会（1990）、前掲、123頁。
- 22) 高田、前掲。
- 23) 同上。
- 24) 社団法人隊友会（1990）、前掲、111頁。
- 25) 同上、111頁。
- 26) 「隊友こそ80年代の国づくりの中核 江崎真澄会長をかこんで新春座談会」隊友 1980年1月15日付 2面。
- 27) 同上。
- 28) 「謹んで新年の御祝詞を申し上げます」隊友 1980年1月15日付 6面。
- 29) 在職時の階級については、隊友会の本部役員一覧と以下の文献・記事に掲載された防衛庁職員名簿等から筆者が確認した。防衛産業協会『自衛隊年鑑（1962年版）』（1962）、1142-1213頁。防衛産業協会『自衛隊年鑑（1963年版）』（1963）、1055-1127頁。防衛産業協会『自衛隊年鑑（1964年版）』（1964）、1110-1192頁。防衛産業協会『自衛隊年鑑（1966年版）』（1966）、1004-1088頁。防衛産業協会『自衛隊年鑑（1967年版）』（1967）、969-1051頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 昭和三十年版』（1955）、355-368頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 昭和三十一年版』（1956）、631-651頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 昭和三十三年版』（1957）、641-660頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 昭和33年版』（1958）、648-679頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 昭和34年版』（1959）、582-607頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1960年版』（1960）、605-635頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1961年版』（1961）、622-648頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1962年版』（1962）、575-598頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1963年版』（1963）、556-562頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1964年版』（1964）、549-561頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1965年版』（1965）、571-585頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1966年版』（1966）、553-568頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1967年版』（1967）、581-601頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1968年版』

- (1968)、628-646頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1970年版』(1970)、618-640頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1971年版』(1971)、623-644頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1972年版』(1972)、636-657頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1973年版』(1973)、617-639頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1974年版』(1974)、637-659頁。防衛年鑑刊行会編『防衛年鑑 1975年版』(1975)、567-583頁。湯元勇三「28年間の予備自衛官生活を振り返って」隊友 1982年9月15日付 7面。
- 30) 社団法人隊友会 (1990)、前掲、382-383頁。
- 31) 「『隊友』アンケートの結果 今後の努力方向は 会員の親ばく・福祉の増進」隊友 1989年5月15日付 6面。
- 32) 「行動する隊友会へ 長崎県連総会開く」隊友 1987年8月15日付 6面。
- 33) 議論の経過は以下を参照。津田、前掲、47頁。
- 34) 1956年に結成された防衛庁所管の社団法人で、戦後各地に結成された旧軍関係者団体の全国組織である日本戦友団体連合会を前身とする。詳細は以下を参照。社団法人日本郷友連盟『日本郷友連盟十年史』(1967)、8-35頁。
- 35) 味岡義一「世界在郷軍人連盟 事務総長が来訪 中村副会長らと懇談 隊友会の連盟加入を期待」隊友 1984年3月15日付 1面。
- 36) 小林利「隊友は国民運動等に積極的に参加しよう」隊友 1985年3月15日付 8面。
- 37) 樺田資孝「府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・」隊友 1987年11月15日付 5面。
- 38) 社団法人隊友会 (1973)、前掲、198-199頁。
- 39) 「竹田五郎前統幕議長に聞く」隊友 1981年3月15日付 4面。
- 40) 「久保田長官に要望書 江崎会長が手渡す 自衛官の処遇改善など」隊友 1980年1月15日付 6面。
- 41) 特定の職務で死亡又は障がいを負った際に、功労の程度によって支給される一時金。詳細は以下の訓令を参照。「賞じゆつ金に関する訓令 防衛庁訓令第15号」(最終改正 平成29年3月28日省訓第13号)。
- 42) 「久保田長官に要望書 江崎会長が手渡す 自衛官の処遇改善など」隊友 1980年1月15日付 6面。
- 43) 社団法人隊友会 (1990)、前掲、174-184頁。
- 44) 真田尚剛「防衛政策・自衛隊の正当性の揺らぎ——1970年代前半における国内環境と防衛大綱に至る過程」『年報政治学 67巻1号』(2016)、178頁。
- 45) 脅威を前提としない防衛構想。第4次防衛力整備計画までは、脅威に応じて防衛力を決める脅威対抗論に基づく年次防が策定されていた。
- 46) 防衛庁『防衛白書 (昭和51年版)』(1976)、37頁。
- 47) 同上、43頁。
- 48) 真田尚剛「『防衛計画の大綱』における基盤的防衛力構想の採用 一九七四—一九七六年——防衛課の「常備すべき防衛力」構想を巡る攻防」『国際政治 188号』(2017)、103頁。
- 49) 同上、101頁。
- 50) 千々と泰明によると、「基盤的防衛力」自体は低脅威対抗論と解釈することも可能で、脱脅威論との間で調整が図られた経緯や、「防衛計画の大綱」策定後にも論争があったことが示されている。千々と泰明「未完の「脱脅威論」——基盤的防衛力構想再考」『防衛研究所紀要 18巻1号』(2015)、144-148頁。
- 51) 丸山昂「防衛大綱の再検討を」隊友 1982年2月15日付 1面。
- 52) 「江崎会長から栗原長官に要望書」隊友 1984年2月15日付 1面。
- 53) 「中期防衛力整備計画について」1985年9月18日閣議決定。
- 54) 「当面の防衛力整備について」1976年11月5日閣議決定。
- 55) 「竹田発言問題三月号に掲載」隊友 1981年2月15日付 1面。
- 56) 「竹田五郎前統幕議長に聞く」隊友 1981年3月15日付 4面。
- 57) 防衛省防衛研究所戦史研究センター編『オーラル・ヒストリー 冷戦期の防衛力整備と同盟政策① 四次防までの防衛力整備計画と日米安保体制の形成』(2012)、173頁。
- 58) 同上、174頁。
- 59) 三好秀男「竹田発言問題と今後の課題」隊友 1981年3月15日付 4面。
- 60) 津田、前掲、49-50頁。
- 61) 三好秀男「時の動き 防衛費一%枠の撤廃へ」隊友 1985年2月15日付 1面。
- 62) 「今後の防衛力整備について」1987年1月24日閣議決定。同計画とは、「中期防衛力整備計画」のことを指す。
- 63) 沓脱和人「戦後における防衛関係費の推移」『立法と調査 395号』(2017)、97-98頁。
- 64) 内田一臣「政治への要望 一九九〇年を見通して」隊友 1980年1月15日付 6面。
- 65) 「名古屋市で改憲国民大会開く」隊友 1981年5月15日付 1面。
- 66) 「江崎会長あいさつ “やることはいっぱいある” 活気満ちた定期総会」隊友 1981年6月15日付 1面。
- 67) 「総会で承認された五五年度事業計画」隊友 1980年7月15日付 1面。
- 68) 「新事業計画を可決」隊友 1981年6月15日付 2面。
- 69) 「新事業計画」隊友 1985年6月15日付 1面。
- 70) 「北方領土返還要求全国大会に参加一呼びもとそう北方領土」隊友 1982年2月15日付 6面。
- 71) 小林、前掲。
- 72) 「祝祭日には国旗を掲げましょう」隊友 1982年12月15日付 8面。
- 73) 「新事業計画 62年度」隊友 1987年6月15日付 1面。
- 74) 「国旗セットを無償で配布 国分寺支部総会で決定 掲揚はまず会員家庭から」隊友 1987年7月15日付 7面。
- 75) 「国旗の掲揚運動 神奈川県連が強力に推進」隊友 1988年2月15日付 4面。

- 76) 「友好団体協を発足 小松基地を支援 隊友会などが結束」
隊友 1988年9月15日付 4面。
- 77) 「自衛隊F15 日本海上空訓練中に接触し2機墜落 パイ
ロットは不明」読売新聞朝刊 1988年6月30日付 31面。
- 78) 主に自衛隊機及び米軍機の離着陸、騒音の差止及び損害賠償
を求めた訴訟で、1975年に提訴された1次訴訟、1983年の
2次訴訟が係争中であった。当時の経緯や1991年の金沢地
裁一審判決の内容は以下を参照。宇佐見大司「小松基地騒音
訴訟第一審判決の問題点——私法的側面からの検討」『ジュ
リリスト 981号』(1991)、16-22頁。高木光「小松基地訴訟
判決の公法上の問題点」『ジュリリスト 981号』(1991)、
23-29頁。木藤伸一朗「基地騒音訴訟の現在——小松基地騒
音訴訟第一審判決から何を読み取るか」『法学セミナー 36
巻8号』(1991)、16-19頁。
- 79) 「友好団体協を発足 小松基地を支援 隊友会などが結束」
隊友 1988年9月15日付 4面。

表3 1980年代の『隊友』における主要論説、解説、ルポ、インタビュー、講演録欄リスト

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1980年1月	3		染谷誠	防衛政務次官	変化に備える柔軟性
1980年1月	3		竹田五郎	統合幕僚会議議長 空将	年頭の辞
1980年1月	3		永野茂門	陸上幕僚長 陸将	日米共同の強化充実
1980年1月	3		大賀良平	海上幕僚長 海将	装備近代化と教育
1980年1月	3		山田良市	航空幕僚長 空将	防衛力の充実整備
1980年1月	3	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	一九八〇年代の幕あけ
1980年1月	6	政治への要望	内田一臣	隊友会副会長	一九九〇年を見通して
1980年1月	6	現代鹿鳴館説話	シグナル		キメ手なき一九八〇年代 軍事常識が通用しない世界 個人と集団がテストされる時
1980年1月	10	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	新年を迎えて
1980年2月	1		野尻徳雄	隊友会副会長	遺憾なスパイ事件 自衛隊の今後の対策に協力
1980年2月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		史書にない史実 求められる正しい歴史を書く勇断 =現代は過去の延長=
1980年2月	6	時の動き	白川元春	隊友会副会長	ソ連軍のアフガン侵入 世界の平和に日本が果たす役割を考える時
1980年2月	7	ソ連のねらい	山崎大喜男	国際情勢研究家	日本のフィンランド化 善隣条約と北方基地強化の背後にあるもの
1980年2月	8	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	55年度年金改正案の骨子
1980年3月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	
1980年3月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	
1980年4月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		最近のご質問に答えて
1980年4月	2				華国録主席の月給・七万円 ☆昔の日米関係と似る今の日中関係☆
1980年4月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	岩島久夫氏(防衛研修所第一戦史研究室長)に聞く 三年目の中国再訪 意外な近代化意識の変質
1980年4月	4		高田安董	常務理事	わが国の防衛力強化 米国、日本へ熱い期待
1980年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	成人病について
1980年4月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	厚生年金改正の見通し
1980年5月	1				週一回、軍事レポート 防衛庁から首相に 江崎会長の提案実る 首相官邸とのパイプを太く
1980年5月	2		内田一臣	隊友会副会長	よき友人の国から 中華民国輔導会議大会に招かれて
1980年5月	3	時の動き	白川元春	隊友会副会長	日本の防衛努力 首相の強い指導力発揮を
1980年5月	3	現代鹿鳴館説話			緊急座談会 カーター戦略を斬る イラン人質救出作戦失敗の真相?
1980年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医師・大阪府連名誉会長	高血圧について
1980年5月	7	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	若年停止の方へのご注意 (付)税金の説明
1980年5月	8	ソビエトシルクロード紀行	扇貞雄	共産圏問題評論家	郊外に日本人墓地 タシケント 捕虜が建てた大劇場
1980年6月	1		新井正明	大阪防衛協会会長	日向発言 愛国の至情の発露 防衛問題積極的な関西財界 新井大阪防衛協会会長祝辞
1980年6月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		清水幾太郎氏 転向? “日本よ国家たれ” 言論界騒然! 外国人も多様な論評
1980年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医師・大阪府連名誉会長	糖尿病について
1980年6月	6		原寿満夫	理事	東南アジアの横顔 第四回海外研修を前にして
1980年6月	7	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	国会の解散と年金の改正
1980年6月	8	ソビエトシルクロード紀行	扇貞雄	共産圏問題評論家	各地に歴史博物館 史実尊重に大きな努力
1980年7月	4	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医師・大阪府連名誉会長	肝臓病について
1980年7月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金財政問題点
1980年7月	7		中島直臣	隊友会理事	バブア・ニューギニア旅行記 誇り高き住民たち 活躍する元自衛官 清野不二雄氏
1980年7月	8		堀田耕三	大阪府連名誉会長	中国医学研修の旅
1980年7月	8	現代鹿鳴館説話	シグナル		抑止力の源泉 一億人の日本より五百万人のフィンランドがこわいロシア人
1980年8月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	“中国と四つの現代化”
1980年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医師・大阪府連名誉会長	夏の衛生について
1980年8月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	減額退職年金とその改正
1980年8月	6	予備自衛官全員集合!ただ今訓練中	原木徹	東京・赤坂プリンスホテルレストランマネージャー	日の丸の旗の下に 自衛隊は私のバックボーン
1980年8月	7	現代鹿鳴館説話	シグナル		<冷いマスクワの熱い夜> アルバイトに精出すロシア人
1980年9月	2		渡辺	記者	江崎会長訪道随記 企業誘致に悪影響 知事さん“陳情” 興味本位なソ連脅威論
1980年9月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	火災起したソ連原潜
1980年9月	5	現代鹿鳴館説話	シグナル		超音速時代の駆馬車意識 ビストル構えて“取引をやろう” -自動車VS防衛強化-
1980年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医師・大阪府連名誉会長	日本脳炎について
1980年9月	6		高田安董	隊友会常務理事	カナダ在郷人会の概要
1980年9月	6		高橋文雄	栃木新聞社編集参与	韓国を訪ねて(上)
1980年9月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	56年度予算要求からみた恩給改正の目安
1980年9月	7		山口立	前隊友会理事	フィンランドの旅
1980年9月	7		広瀬栄一	郷友連理事長	民防施設を見て
1980年9月	8		浦茂	隊友会相談役	隊友は国の財産 検討してほしい三つの提案
1980年10月	4	現代鹿鳴館説話	シグナル		<ULTRAとMAGIC>-情報戦に負けた日独- ☆「シグナル」を殺す日本☆
1980年10月	4	時の動き	白川元春	隊友会副会長	イラン・イラク戦争
1980年10月	4		O		成果あげた遠航部隊 ハヶ国親善訪問 各国海軍が歓迎
1980年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医師・大阪府連名誉会長	腰痛について
1980年10月	8		岩島久夫	防研第一戦史研究室長	日英シンポジウムに参加して 勢揃いした与野党代表七人 史上最初の海外国会討論会

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1980年10月	9		高田安董	隊友会常務理事	隊友会この十年の足跡
1980年10月	10		高橋文雄	栃木新聞社編集委員	韓国を訪ねて(下)
1980年11月	4		野尻徳雄	20周年大会実行委員長	隊友会会況報告
1980年11月	6	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	防衛論争の焦点
1980年11月	6	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	肩コリについて
1980年11月	7	現代鹿鳴館説話	シグナル		☆ノーベンバー・サブライズ☆ レーガンはタカ派か? =国を動かすは艦を操るに似たり=
1980年11月	7		高田安董	隊友会常務理事	米国の退役軍人諸団体
1980年11月	7	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	高額所得者の年金の一部停止
1980年11月	8		矢田部稔	陸幹校	OCU キリスト者将校会 世界大会に参加して・・・(上)
1980年12月	4		岩島久夫	防研第一戦史研究室長	傍聴記 防衛トップセミナー パネル・ディスカッションの印象
1980年12月	4	感銘呼ぶ各氏の講演要旨	松下正寿		西欧文明に活を入れるわが国の新国家目標
1980年12月	4	感銘呼ぶ各氏の講演要旨	小山茂樹		中東、世界的な紛争地帯 真剣に考えるべき時機に
1980年12月	4	感銘呼ぶ各氏の講演要旨	佐伯喜一		ソ連軍勢力に優位 米、同盟国と共に対抗
1980年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	神経痛について
1980年12月	5		高田安董	団長 常務理事	第四回海外研修旅行団帰る ビルマ 台湾 在郷軍人会と交歓
1980年12月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	一部年金額の増額改定について
1980年12月	6	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	安全保障三題
1980年12月	6	現代鹿鳴館説話	シグナル		☆発想の逆転☆ 日“リメンバー・パールハーバー” 米“広島・長崎忘れまじ” =“対決”の情報から“紛争防止”の情報へ=
1980年12月	8		矢田部稔	陸幹校	キリスト者将校会 世界大会に参加して・・・(下)
1981年1月	1	新年のご挨拶	江崎真澄	会長	
1981年1月	3		大村	防衛庁長官	国の安全確保は政治最大の責務 隊友会の支援に感謝 大村防衛庁長官の新年あいさつ
1981年1月	3	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	厚生年金の改正
1981年1月	4	新春随想	扇貞雄	共産党問題評論家	ポーランド情勢に想う
1981年1月	8		竹田五郎	統幕議長	自衛隊精強化に最大の努力
1981年1月	8	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	インフルエンザ
1981年1月	9	北海道の隊友から	多田隆義	根室支部長	戦後は終わっていない
1981年1月	9	沖縄の隊友から	又吉康助	県連会長	沖縄の仲間達
1981年1月	9	危機時代	中村龍平	隊友会副会長	八〇年代の第二年目迎えて
1981年1月	9	現代鹿鳴館説話	シグナル		中国よどこへ行く? 日米中文化協会発会に寄せて ロシア語熟の 高いハルビン 資源探査衛星米中日協力のうわさ
1981年2月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		デジタル時代のデジタル大統領 レーガンの持味生かすシナリオを 休息癒し、回復を求める米国民
1981年2月	2		高田安董	隊友会常務理事	ビルマの在郷軍人会
1981年2月	2				見たこと感じたこと 第四回海外研修報告
1981年2月	4	時の動き	白川元春	隊友会副会長	56年度予算と日米関係
1981年2月	5		味岡義一	常務理事	活躍する各国在郷軍人会 WVF 創立30周年式典に参加して
1981年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	腎臓病について
1981年2月	6	編集長現地ルポ	渡辺徳義	編集長	京都の予備自衛官 その生活と意見
1981年2月	7		野尻徳雄	隊友会相談役	児玉源太郎將軍の遺徳偲ぶ 江の島の新名所へ 児玉神社 遠くからも多く参拝者
1981年3月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		米議会“忍び爆撃機”騒動 問 ソ連にもあるだろうか? 答 見えないものが何故わかるんだ =漏洩はカーターの選挙工作か? =
1981年3月	4	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	竹田発言問題と今後の課題
1981年3月	4		渡辺	編集長	竹田五郎前統幕議長に聞く
1981年3月	5		下村得治	東京都新宿・歌舞伎町商店街振興組合副理事長	最近の自衛隊議論に想う
1981年3月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	56年度の年金改正の見通し
1981年3月	7		関根文之助	高千穂商科大学学長	「建国記念日」にキリスト教全体が反対しているのではない 日本のキリスト者はりつぱな日本人であれ
1981年4月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		<レーガンの強襲>やはりある日米間のパーセプション・ギャップ ☆自衛隊員を雇いたい☆
1981年4月	4	時の動き	丸山昂	隊友会副会長	重大な教科書問題 “日暮れて途遠し”の対策
1981年4月	6		信濃太郎	三等陸佐	隊友会創立20周年記念論文選外佳作 隊友会に期待する
1981年4月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	主たる給与と従たる給与
1981年5月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		すごいアメリカとなっていないアメリカ 二つの顔を持つ大国
1981年5月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	有事法制と緊急対処
1981年5月	5	私の提案	野尻徳雄	隊友会相談役	隊友紙の手渡しで顔合わせの機会作れ
1981年5月	6	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	膠原病について
1981年5月	6	追悼	高橋文雄	栃木・隊友	我が師の殉職
1981年5月	7		稲葉明弘	札幌中央支部長	隊友会創立20周年記念論文選外佳作 われらかく戦えり
1981年5月	7	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金での高令者優遇
1981年6月	1		渡辺	要旨筆記 記者	江崎会長あいさつ 活気満ちた定期総会“やることはいっぱいある” 時局重大 隊友会の使命果そう 自衛隊と共に力強く前進
1981年6月	1		大村襄治	防衛庁長官	共に行動 平和と発展に寄与 確固たる隊友会の地位を 大村長官祝辞
1981年6月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		遅れている日本の大学 安保講座 外国では活発な研究活動
1981年6月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	“たてまえよりも本音を出す時”
1981年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	皮膚病について 素人のステロイド軟膏乱用は危険
1981年6月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金改訂の実施 七月中には差額も
1981年6月	6		伊藤博	山形県連	国境紛争・難民・クーデターの国 タイ国を歩いて
1981年6月	6		大林敦夫	熊本県連隊友	隊友会創立20周年記念論文選外佳作 十年後の隊友会

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1981年8月	1	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	岩島久夫	防衛研修所第一戦史研究室長	北極中心の世界地図で考えよう 国際軍事情勢の基本的ワク組
1981年8月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		真夏の夜の放談 架空座談会 わたしと日本
1981年8月	4	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	有事即応態勢の整備
1981年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	水虫について 根気よく治療すれば必ず治る
1981年8月	5		植村覚輔	隊友会国立支部長	同志のきずな 隊友会はかくして生れた
1981年8月	6		高田安董	常務理事	北方領土返還運動の意義
1981年8月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	一般方式と通年方式
1981年9月	1	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	内田一臣	隊友会副会長	いかにして海上交通路の安全を守るか 日米友好と協調の第一歩
1981年9月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		数字ゲーム 日本は軍事準超大国！？
1981年9月	4	時の動き	丸山昂	隊友会副会長	訪韓雑感
1981年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	真菌症について 特にカンジダ症に注意
1981年9月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	行財政改革と年金改定
1981年10月	1	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	白川元春	隊友会副会長	日本本土防衛のカギは緒戦の航空作戦にある
1981年10月	2		植村英一	研修団長	海外研修総括報告
1981年10月	2				隊友の中国研修旅行記<その1> 中国人民解放軍副総参謀長伍修権氏と会談
1981年10月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		こうすればSS・20に対抗できる —坐して死を待つだけが能ではない—
1981年10月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	防衛白書
1981年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	高尿酸血症について その代表的疾患は痛風
1981年10月	5		植村覚輔	東京都連国立支部長	同志のきずな 隊友会はかくして生れた(その2)
1981年10月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	若干の留意事項を・・・
1981年11月	1	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	栗栖弘臣	隊友会相談役	日本の開かれた面と閉じられた面
1981年11月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		新説・アリゾナ沈没は英フロッグマンが仕掛人 パールハーバー後四十周年の怪
1981年11月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	中東情勢の暗転と日本
1981年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	鼻の疾患について 慢性鼻病は全身的酸欠の遠因
1981年11月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	12月の支給額について
1981年11月	6		高田安董	隊友会理事	会費をめぐる諸問題
1981年11月	6		中島直臣	隊友会理事	西部方面隊 夜間戦闘演習見学記
1981年12月	2	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	中村龍平	隊友会副会長	国際環境と日本の防衛
1981年12月	3		森本真章	筑波大学講師	第八回防衛トップセミナー講演から 教科書は偏向している
1981年12月	3		中川融	日本国際問題研究所理事長	第八回防衛トップセミナー講演から 北方領土は強く主張を
1981年12月	3		野崎伸六	東海大学教授	第八回防衛トップセミナー講演から 変る米国の外交政策
1981年12月	3		竹田五郎	前統合幕僚会議議長	第八回防衛トップセミナー講演から 目標に達しない防衛力
1981年12月	4	時の動き	白川元春	隊友会副会長	日米関係の修復はできるか —新しい内閣に望む
1981年12月	4	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	遺族年金について説明
1981年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	アレルギーについて 生体にとって病的な過敏反応
1981年12月	5		植村覚輔	東京都連国立支部長	同志のきずな 隊友会はかくして生れた(最終回)
1981年12月	6				私の見たこと・・・感じたこと・・・ 隊友会中国研修旅行報告
1981年12月	6		内田一臣	隊友会副会長	台湾訪問記
1982年1月	1		伊藤宗一郎	防衛庁長官	年頭のご挨拶
1982年1月	2	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	新井弘一	防衛庁参事官	米国の対ソ政策を考える
1982年1月	3		岩島久夫	防衛研修所第一戦史研究室長	新技術戦略の時代
1982年1月	3		矢田次夫	統幕議長	年頭の辞
1982年1月	5	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	五十七年度防衛予算案の決定
1982年1月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	新春余談 企業年金と個人年金
1982年2月	1	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	丸山昂	隊友会副会長・援護本部長	防衛大綱の再検討を 陸海空自衛隊統合運用体制樹立急げ
1982年2月	2.3			編集長	広島一員—江田島 編集長現地ルポ
1982年2月	4		内田一臣	隊友会副会長	訪米所感
1982年2月	4	現代鹿鳴館説話	シグナル		対決という名の対話 ソ連が軍事パンフレット 題名「平和への脅威はどこから？」
1982年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	ゼンソクについて 単純でない全体的疾患
1982年2月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	昭和57年度恩給改善案
1982年3月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		心身症候社会と心身症候指導者 世界をおおう危険な政治病理診断
1982年3月	4	国民のための防衛学「井戸の中の平和」ボケから開眼	三好秀男	隊友会副会長	防衛諸計画の体系のあらまし 現状の分析と今後の課題
1982年3月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	心身症について 精神と身体の不可分性
1982年3月	6		高田安董	隊友会常務理事	防衛予備勢力拡大の推進
1982年3月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	57年度共済年金改正(案)
1982年4月	1				鈴木首相、真意を語る シーレーン防衛問題 江崎会長の質問に答えて シーレーンの防衛は日本の自主的意思で

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1982年4月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		議論百出 ソ連へ輸出の浮ドック 石川島播磨処罰論から米提供因インチキ説まで
1982年4月	4	時の動き	丸山昂	隊友会副会長	ソ連利する反核運動 理性的に慎重な対応を
1982年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	ストレスとは 一外因による生体機能のひずみー
1982年4月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	戦務加算への期待に対して
1982年4月	6		山崎大喜男		西側の分断・孤立化ねらうソ連の戦域核 「反核運動」はソ連戦略の一環
1982年4月	6		寺部甲子男	常務理事	フォークランド諸島紛争
1982年5月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		フォークランドの教訓 十秒もあったのに！ 「精密誘導兵器の時代」再確認
1982年5月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	シナイ半島の返還とフォークランド紛争
1982年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	胃腸の疾患① 一胃下垂と胃弱ー
1982年5月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金支給に関する二、三の補足
1982年5月	6		扇貞雄	共産党問題評論家	日ソ対等のテーブルにつくために・・・
1982年5月	7		山崎大喜男	軍事評論家	西側の分断・孤立化ねらうソ連の戦域核 「反核運動」の狙いは日・欧の非核化
1982年6月	2		田中象二	常務理事	隊友会会況報告
1982年6月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		米ソ核戦争は起るか コントロールされた核戦争
1982年6月	4		山口立	元隊友会理事	殉職自衛官合祀裁判 二審判決に思う
1982年6月	4		長谷晋	前隊友会理事	合祀裁判その経過と今後
1982年6月	4	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	配偶者の通算年金とカラ期間
1982年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	胃腸の疾患② 一急性及び慢性胃炎ー
1982年7月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		電子を制するものは戦場を制す イスラエルのレバノン侵攻
1982年7月	3	連載	植村英一		中国再訪
1982年7月	4				わが国防衛上の諸問題 矢田統幕議長 隊友会総会で講演
1982年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	胃腸の疾患③ 胃・十二指腸潰瘍と癌（ママ）
1982年7月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	57年度年金改定と差額の支給
1982年8月	2	特集 活躍する神奈川県連	渡辺	編集長	日・米隊友の親善、交流を推進 青山県連会長と一門一答
1982年8月	3		平野弥	神奈川県連副会長	横須賀と米海軍
1982年8月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	日米関係のこのごろ
1982年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	胃腸の疾患④ 一便秘と下痢ー
1982年8月	5	年金ガイド	寺部甲子男	本部常務理事	フォークランド紛争余話
1982年8月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	共済年金の一本化とは
1982年8月	6	現代鹿鳴館説話	シグナル		山下将軍の四つ首 シンガポール「降服艦」の軋人形
1982年8月	8	連載	植村英一	前本部監事	中国再訪
1982年9月	4	時の動き	白川元春	隊友会副会長	わが防衛政策に欠けているもの ハワイ事務レベル協議が終って
1982年9月	4		寺部甲子男	本部常務理事	フォークランド紛争余話
1982年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	胃腸の疾患⑤ 一過敏性大腸と潰瘍性大腸炎ー
1982年9月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	凍結された退職一時金は
1982年9月	6	現代鹿鳴館説話	シグナル		P3Cとリヤカー 一「防衛突出」への疑問ー
1982年9月	6		畝本正巳	理事	支那事変と南京事件
1982年9月	7		湯元勇三	本部理事	28年間の予備自衛官生活を振り返って
1982年9月	8	連載	植村英一		中国再訪
1982年10月	4	現代鹿鳴館説話	シグナル		F-16の三沢配備 米国の真意 対ソのみならず、対日か？
1982年10月	4		三好秀男	隊友会副会長	注目を集めた日米防衛首脳会議
1982年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	消化管の癌 一胃癌と大腸癌ー
1982年10月	5		寺部甲子男	本部常務理事	フォークランド紛争余話
1982年10月	8	連載	植村英一		中国再訪
1982年11月	4	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	今後への年金対策の方向
1982年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	食道の疾患 主として食道癌について
1982年11月	5		寺部甲子男	本部常務理事	フォークランド紛争余話
1982年11月	8	連載	植村英一		中国再訪
1982年12月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		米国防長官室を拜見 並ぶ各国の贈り物 わが防衛庁長官のは・・・
1982年12月	3	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	財形年金 貯蓄制度とは
1982年12月	4	時の動き	丸山昂	隊友会副会長	アンドロポフ政権の出現
1982年12月	4		口野昌三	隊友会監事・弁護士	自衛隊員は政党的の党員になれるか 質問に答えて
1982年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	動脈硬化症 予防は子供のうちから
1982年12月	6		高橋文雄	栃木県連	アメリカで見たこと感じたこと 第六回海外研修報告 / 西部大平原の感動 / 自衛隊のミサイル 目標に命中の一瞬！ エルバスで / 歩兵25師団を見学 / 真珠湾も訪問 さまざまな思いが交錯
1982年12月	7		寺部甲子男	本部常務理事	フォークランド紛争余話
1982年12月	8		味岡義一	常務理事	世界在郷軍人連盟アジア、太平洋地区委員会報告 / 会場で隊友会の発興状況を報告
1983年1月	1		江崎真澄	会長	全国の隊友の皆さんへ 新年のごあいさつ
1983年1月	2		谷川和徳	防衛庁長官	年頭の辞
1983年1月	3		矢田次夫	統合幕僚会議議長	年頭のごあいさつ
1983年1月	5	現代鹿鳴館説話	シグナル		魔の五分間をめぐる論争 戦史の教訓とは何か
1983年1月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	アルコール性肝障害 一酒は必ず食物と共にー
1983年1月	10	新春論壇	畝本正巳	隊友会理事	再び「南京事件」について
1983年2月	2				南極観測支援「白い砂漠」とたたかう自衛隊魂
1983年2月	3		前田冬樹	第七代ふじ艦長	追想
1983年2月	4	現代鹿鳴館説話	シグナル		= ソ連 SS・20 極東移動 = ダンマリ中国の背景は？

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1983年2月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	日本の新しい歩み ソ連の軍拡と米国の対応
1983年2月	5		中島直臣	前理事	副官停年おめでとう！
1983年2月	5	年金ガイド	吉江誠一		若干の補足を
1983年2月	8		堀田耕三	大阪府連名誉会長	ヨーロッパ偶感 われらもまたレコンキスタを
1983年3月	1		渡辺	編集長	谷川防衛庁長官に聞く「クレーダー計画」存在せず
1983年3月	4	現代鹿鳴館説話	シグナル		日米軍事技術協力の狙い？ 日本独自の平和構想を 在日外人記者の意見
1983年3月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	国際情勢・四つの問題点
1983年3月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	春の眼病 =手洗励行 目コスリ禁物=
1983年3月	6		ステファン・J・ソラーズ	米国外交委員会アジア・太平洋小委員長	均衡への探求
1983年4月	4	時の動き	白川元春	隊友会副会長	総理は防衛姿勢を貫け
1983年4月	4		塚本政登士	福岡県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために
1983年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	仮面うつ病について ー前景に出る身体症状ー
1983年4月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	四共済年金の統合問題
1983年4月	8		森山高士	高知隊友	政治決戦の年 自由のために共闘を
1983年5月	4	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	支部活動の活性化を
1983年5月	4		青山基三	神奈川県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1983年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	大阪府連名誉会長・医学博士	脳血管障害(脳卒中) ークモ膜下出血についてー
1983年5月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	共済統合法案について
1983年5月	6		久保田徳夫	隊友会本部事務局長	中華民国を訪問して
1983年5月	8		寺部甲子男	隊友会理事	三十八度線を見る
1983年6月	2		田中象二	常務理事	隊友会会況報告
1983年6月	4		栗栖弘臣	元統幕議長	予備自衛官に期待
1983年6月	4		富岡幸雄	千葉県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1983年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	脳血管障害(脳卒中) ー脳出血と脳梗塞ー
1983年6月	8		伊藤正康	常務理事	ドイツ国防軍協会
1983年7月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	迫る！新しい危機 ソ連の擬態と西側分断策
1983年7月	4		伊藤信芳	帯広支連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1983年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	一過性脳虚血発作 慢性硬膜下血腫・高血圧性脳症
1983年7月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金以外の所得報告について
1983年7月	6				57年度招集訓練を顧みて 陸幕予備自衛官班
1983年7月	8		重久実展	常務理事	中国を訪ねて
1983年8月	2				満四年を迎えた隊友会援護本部
1983年8月	3		倉林和男	千葉県支部連合会員	靖国の英霊に想う
1983年8月	4		古川義道	南九州担当理事	支部組織強化について 分会の編成と地道な活動
1983年8月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	「シャツを脱ぐな、責任果せ」刮目すべき83年後半の日米動向
1983年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	低血圧症について ー夏バテしやすい体質ー
1983年8月	6				地連の努力を顧みる 予備自衛官招集業務
1983年8月	7		寺本貢	西中国道路サービス株式会社社長	日本はこれでよいのか 江崎隊友会会長への手紙から
1983年8月	8		重久実展	常務理事	中国を訪ねて(その2)
1983年9月	5	時の動き	白川元春	隊友会副会長	56中業の達成は困難 59年予算要求をながめて・・・
1983年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	貧血について 軽視出来ない健康の基本問題
1983年9月	5		仙田明一	愛知県連会長	ズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1983年9月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金改正はいつ？
1983年9月	7				地連の努力を顧みる 予備自衛官招集業務
1983年9月	8		扇貞雄	共産圏問題評論家	ソ連の実態に開眼せよ 大韓民航空機墜落事件に思う
1983年9月	8		中島直臣	元西方総監	物言えぬ自衛官を支援代弁せよ！「防衛政治連盟」の結成急げ
1983年9月	8		中島直臣	元西方総監	総監も世間に出れば六十点
1983年10月	5	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	矛盾だらけの非武装中立論
1983年10月	5		伊達卓郎	和歌山県連会長	ズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1983年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	甲状腺疾患 ーパセドウ病と橋本病ー
1983年10月	7				地連の努力を顧みる 予備自衛官招集業務
1983年10月	7	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	申告を忘れずに
1983年11月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	危機管理態勢の整備急げ
1983年11月	4		小林有一	本部理事	各地で実り多い収穫 東南アジア研修旅行所見
1983年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	高脂血症について ーコレステロールと中性脂肪ー
1983年11月	5		坂本経雄	広島隊友	肌で感じた現地情勢 再検討期迎えた東南アジア
1983年12月	2	予備自衛官コーナー	伊藤正康		神奈川 千葉 予備自衛官大会 出席所感
1983年12月	4	防衛セミナー報告記			白熱のパネル討議 第十回防衛トップセミナー東京会場
1983年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	白内障と緑内障 四〇歳すぎれば必ず眼圧測定を
1983年12月	5		角口憲基	佐賀県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1983年12月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	減税法の成立とその適用
1983年12月	7	わたしの帰国報告	寺部甲子男	本部常務理事	南西シーレーンの要衝 台湾の軍事的警見
1983年12月	8	会員の投書	原木徹		奮起せよ予備自衛官 創設30周年を前に思う
1983年12月	8		志摩純三	埼玉隊友	ナポレオンのスパイ
1984年1月	1		中村龍平	隊友会副会長	一九八四年の展望 わが国の安全保障をめぐる
1984年1月	2		村井澄夫	統合幕僚会議議長	年頭の挨拶
1984年1月	4	ズバリ本音！	(有)		自衛隊をとりまく不合理性の解剖へ
1984年1月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	虚血性心疾患について ー狭心症と心筋梗塞ー
1984年2月	3	時の動き	白川元春	隊友会副会長	なぜ、一%なのか 防衛費のGNP対比
1984年2月	4	ズバリ本音！	(有)		防衛計画は絵に画いたモチだ？

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1984年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	めまいについて メニエール病は文明病
1984年2月	5		堀田起	山口県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1984年2月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金改定の見通し
1984年3月	1		味岡義一	常務理事	世界在郷軍人連盟事務総長が来訪 中村副会長らと懇談 隊友会の連盟加入を期待
1984年3月	2				予備自衛官制度発足30年 業務担当者の意見を聞く
1984年3月	3	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	ソ連新政権の動向
1984年3月	4	ズバリ本音!	(有)		諸悪の根源は「憲法解釈」だ
1984年3月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	聴覚障害について 一難聴と耳鳴り一
1984年3月	5		小崎武	宮城県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1984年3月	8		伊藤博	山形県連	海外から日本を省みる
1984年4月	3	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	情報操作と平和ボケ
1984年4月	4	ズバリ本音!	(有)		山口事件の原点
1984年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	頭痛について 片頭痛と筋収縮性頭痛
1984年4月	5		加納健一	東京道連杉並支部長	三たび訪韓、38度線に立つ
1984年4月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金の二段制とは
1984年5月	3	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	朝鮮半島 果して緊張緩和に向うか
1984年5月	4	ズバリ本音!			実りある人事を
1984年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	膵臓疾患について 一アルコールと脂肪食を警戒一
1984年5月	6		廣谷次夫	隊友会理事	中華民国を訪問して
1984年6月	2		田中象二	常務理事	隊友会会況報告
1984年6月	3	時の動き	白川元春	前副会長	ベルシヤ湾 風雲急 イ・イ戦争の新たな段階
1984年6月	4	ズバリ本音!	(有)		「陸上防衛力の整備にひと言」
1984年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	胆道疾患について 胆石病と胆嚢炎
1984年6月	5	年金ガイド	吉江誠一		増額改定による差額の支給
1984年6月	6		梅野文則	常務理事	中国(東北地方)を訪ねて
1984年6月	8	私の提案	中島幹彦	国分寺支部長	予備自衛官が隊友会に全員加入する試案
1984年7月	2		三宅義信	ロス五輪大会重量あげ監督	日本の神よ守って下さい
1984年7月	3	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	自衛隊三十年のあゆみ
1984年7月	4	ズバリ本音!	(有)		伝統の教訓
1984年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	食中毒について 一冷蔵庫の過信は禁物一
1984年7月	5		秋山源太郎	岡山県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1984年7月	8	連載・スイスに旅して	植村英一	隊友会前監事	アンリ・ギザン将軍を偲ぶ
1984年8月	2	8月15日「終戦の日」戦争と平和について考える	中村龍平	元統幕議長	原点にかえり国守の大戦略を
1984年8月	2	8月15日「終戦の日」戦争と平和について考える	原徹	元防衛事務次官	自由貿易体制と防衛
1984年8月	2	8月15日「終戦の日」戦争と平和について考える	竹田五郎	元統幕議長	戦える自衛隊の育成
1984年8月	3		内田一臣	元海上幕僚長	思い出は昨日のごとく
1984年8月	3				丹下健三氏、ヒロシマを語る 江崎真澄会長との希望対談から
1984年8月	3		岩島久夫	防研戦史第一研究室長	「蛟龍」艦長始末記
1984年8月	4	ズバリ本音!	(有)		良識の足枷
1984年8月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	総合安全保障と国際的責任
1984年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	夏かぜについて プールで水泳後は必ず洗眼
1984年8月	5		小崎武	宮城県連会長	総会に出席して
1984年8月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	増額改定への疑問に
1984年8月	8	連載・スイスに旅して	植村英一	隊友会前監事	アンリ・ギザン将軍を偲ぶ
1984年8月	8		大山千秋	隊友モニター 一曹	隊友モニター提言
1984年9月	3		江崎真澄	元防衛庁長官	金メダルと自衛隊 「文芸春秋」36年2月号掲載から
1984年9月	4	ズバリ本音!	(有)		日韓新時代の原点
1984年9月	4		竹田五郎	隊友会副会長	在独英軍基地訪問 トーネード戦闘機試乗
1984年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	前立腺疾患について 前立腺肥大症と前立腺癌
1984年9月	6	ズバリ提言	佐々木信雄	香川県連	現職の声を代弁せよ
1984年9月	6	ズバリ提言	又吉康助	沖縄県連	選挙に関心を持とう
1984年9月	8	連載・スイスに旅して	植村英一	隊友会前監事	アンリ・ギザン将軍を偲ぶ
1984年9月	8		依田信夫	横須賀支部	機関紙「隊友」の青春譜
1984年10月	2	時の動き	原徹	隊友会副会長	軍国主義考
1984年10月	5		大嶋喜代松	長野県連会長	ズバリ提言 隊友会を強化し前進させるために 隊友会に若い活力を
1984年10月	5	投稿	吉池昭雄	仙台隊友	愛する隊友会への提言
1984年10月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	通年方式の年金額引上げと財源率の再計算について
1984年10月	8	連載・スイスに旅して	植村英一	隊友会前監事	アンリ・ギザン将軍を偲ぶ
1984年10月	8		四元信義		活動する防衛庁観世流謡曲会 趣味を通じて隊友が親睦
1984年11月	2				隊友会員韓国研修レポート
1984年11月	2		内田一臣	隊友会副会長	内田研修団長所感 韓国を訪ねて
1984年11月	3		小林有一	研修担当	韓国研修所感 休戦国の国防意識
1984年11月	4	時の動き	大賀良平	隊友会副会長	トマホークと日本の防衛

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1984年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	痛風について 生涯の尿酸コントロールが必要
1984年11月	5		竹内繁秋	大阪府連会長	ズバリ提言 隊友会を強化し前進させるために 専従職員の予算を
1984年11月	6		栗栖弘臣	隊友会相談役・元統幕議長	軍事パレードを参観して 栗栖弘臣氏中国訪問記
1984年11月	6	ズバリ本音!	(有)		覆水を盆にかえす
1984年11月	8	連載・スイスに旅して	植村英一	隊友会前監事	アンリ・ギザン将軍を偲ぶ
1984年12月	3		伊藤正康	常務理事 予備自衛官担当	記念式典に参列して
1984年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	尿路結石について 背景をなす原因の探求
1984年12月	5		寺林潔	札幌支部連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・ 隊友会法の制定を
1984年12月	5	年金ガイド	吉江誠一		共済年金制度改革の構想
1984年12月	6		藤倉賢典	予備三陸曹 隊友会南陽支部長	日本一の戦闘訓練
1984年12月	7		堀田耕三	大阪府連名誉会長	スコットランドの旅
1984年12月	8	連載・スイスに旅して	植村英一	隊友会前監事	アンリ・ギザン将軍を偲ぶ
1985年1月	1		江崎真澄		新年のごあいさつ
1985年1月	2		加藤統一	防衛庁長官	新年のごあいさつ
1985年1月	3		渡部敬太郎	統幕議長	この道一筋に精強を求めて
1985年1月	3				要望書の内容
1985年1月	7	ズバリ本音!	(有)		安全保障新時代への転換
1985年2月	1	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	防衛費-%枠の撤廃へ
1985年2月	2	編集長の広島ルポ	渡辺徳義	編集長	広島県連の灯を消すな 三浦前事務局長の遺言
1985年2月	3		欽本正巳	中国地区担当理事	「南京事件」偏向報道に関連して 戦場における軍隊・人間の反省
1985年2月	4	ズバリ本音!	(有)		「舟に刻みて剣を求む」
1985年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	「かぜ」と肺炎 特に危険な老人の肺炎
1985年2月	5		猿渡篤信	熊本県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・ 老、壮、青が団結前進
1985年2月	5	年金ガイド	吉江誠一		60年度恩給改善の構想
1985年3月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	米ソの核軍縮交渉 理解のための共通の言葉
1985年3月	4		大塚政夫	大分県歩四七会 元二等陸佐	台湾で見た、さまよう英霊と悲嘆に沈む遺族の姿
1985年3月	5		相楽今朝夫	青森県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・ 国民防衛の先頭に
1985年3月	5	わたしの所感	原木徹	都連国立支部	コーヒーマ一杯でも天下国家は語れる 若者が親しめる会合を!
1985年3月	6	紙上探録	三雲四郎	サンケイ新聞論説顧問	関西防衛セミナー講演から 新しい国際情勢の展望と日本の立場
1985年3月	8		小林利	隊友会茨城支部連合会副会長 日本郷友連盟理事 兼茨城支部副会長	隊友は国民運動等に積極的に参加しよう
1985年3月	8		石山輝一	松山城東支部桑原分会	自衛官の社会的地位の向上を・・・ 江崎会長への手紙
1985年4月	4	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	米ソ軍縮交渉とソ連新政権
1985年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	腎炎とネフローゼ① 対応を誤ると大変な難病
1985年4月	5		庭屋陽之助	埼玉県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・ 仲間意識で交流の輪を深め拡大しよう
1985年4月	5	年金ガイド	吉江誠一		年金制度の改正と現受給者への影響
1985年5月	2	動く編集室	渡辺徳義	編集長	富岡幸雄千葉県連会長に聞く
1985年5月	4	時の動き	原徹	隊友会副会長	日米貿易摩擦に思う
1985年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	腎炎とネフローゼ② 対応を誤ると大変な難病
1985年5月	7		小崎武	宮城県連会長	予備自衛官制度三十年を迎えて
1985年6月	2		田中象二	常務理事	隊友会会況報告
1985年6月	3		江崎真澄	会長	隊友会総会 江崎会長あいさつ《要旨》
1985年6月	4	時の動き	大賀良平	隊友会副会長	F16の三沢基地配備
1985年6月	4		原川正光	鹿児島県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1985年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	不整脈について 基礎疾患の判別を
1985年6月	5	年金ガイド	吉江誠一		本年度の年金改定案
1985年6月	6		皆本義博	隊友会参予	沖縄戦40回忌渡嘉敷島の慰霊祭
1985年7月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	ソ連の新しい政権
1985年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	心不全について 一自己の心臓の限界を知れ
1985年7月	5		佐々木外幸	石川県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1985年8月	2				回想と所感 各氏の八月十五日
1985年8月	4	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	防衛費新歯止め方式浮上
1985年8月	5	年金ガイド	吉江誠一		新年金制度について若干の補足を
1985年8月	6		三島栄太郎	旭川支部連合会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1985年8月	8		堀田耕三	大阪府連名誉会長	私の台湾拝見記
1985年9月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	戦後四十年日を迎えて
1985年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	心筋疾患について 心筋炎・心筋障害・特発性心筋症
1985年10月	4	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	日本人は豚になったのか
1985年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	睡眠障害について ～特に不眠症とその背景～
1985年10月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	秋の申告に備えて
1985年11月	2		重久	理事	新中国拝見記
1985年11月	4	時の動き	大賀良平	隊友会副会長	新防衛計画と洋上防空体制
1985年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	むくみ浮腫について 一急激な体重増加に注意
1985年11月	6		小崎武	宮城県連会長	地道な努力の積み重ねを
1985年11月	6		山田正之	広島県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1985年12月	4	時の動き	原徹	隊友会副会長	米ソ・サミットについて

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1985年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	続・むくみ(浮腫) 一特に老人と女性の場合一
1985年12月	5	年金ガイド	吉江誠一		新年金制度での併給調整
1985年12月	6				中国研修 その要点と所見
1985年12月	8		高橋文雄	栃木県副会長	飛行機野郎渡米報告
1986年1月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	一九八六年を迎えて
1986年1月	6		味岡義一		世界在郷軍人連盟総会に出席して
1986年1月	6		渡部敬太郎	統合幕僚会議議長	新たな飛躍を求めて
1986年1月	7	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	呼吸器疾患① 一慢性気管支炎と肺気腫一
1986年1月	8		川久保太郎	東京都連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年2月	4	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	流動する年初の内外情勢
1986年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	呼吸器疾患② 一肺結核と肺癌一
1986年2月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	過去の一時金の返還について
1986年3月	2	世界の国防			国民の国防意識が高い国スイス 国民皆兵でGNP2%を国防費に充てべきの民間防衛
1986年3月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	日本人の魂
1986年3月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	呼吸器疾患③ 一気管支拡張症その他一
1986年3月	5		伊藤武	静岡県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年3月	5	年金ガイド	吉江誠一		年金の増額改定 一般方式の人には及ばず
1986年4月	2	談論風発 憂国快論 参与等の懇親パーティ	伊藤	元長官	防衛力あってこそ平和な日本がある 伊藤元長官あいさつ
1986年4月	2	談論風発 憂国快論 参与等の懇親パーティ	矢崎	次官	良好な日米関係 国民とのかけ橋 隊友会の支援期待 矢崎次官あいさつ
1986年4月	4	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	最近の基地反対運動に思う
1986年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	痔疾について 一肛門出血の軽視は禁物一
1986年4月	5		五十嵐一雄	秋田県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年5月	4	時の動き	原徹	隊友会副会長	日本はSDIの研究に参加すべきである
1986年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	網膜剥離と眼底出血 一目は心の窓・体の窓
1986年5月	6		早乙女嘉男	栃木県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年5月	7		青山基三	本部長理事 神奈川県連会長	中華民国輔導会議に招かれて
1986年6月	3		渡辺	理事	隊友会会況報告
1986年6月	4		稲森友三郎	元三師団長	中国を訪問して
1986年6月	4	時の動き	大賀良平	隊友会副会長	リムパック 86
1986年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	急性腹症について 一激急な腹痛の起ったとき
1986年6月	5	年金ガイド	吉江誠一		標準報酬月額と遺族共済年金
1986年7月	1	読者の声			自民党よ！自衛隊をナメたらアカンよ
1986年7月	2				防大時代の到来！自衛隊ニューリーダーに聞く
1986年7月	4		吉原瑞穂		防衛駐在官が見た中国の防衛態勢 垣根の無い軍隊
1986年7月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	米・中・ソ ～その変化と防衛
1986年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	「酢」の効用 一特にクエン酸の作用について一
1986年7月	5		清水匡一郎	京都府連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年8月	3		吉原瑞穂		防衛駐在官が見た中国の防衛態勢 垣根の無い軍隊 (2)
1986年8月	3		木村俊	鳥取県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年8月	4	時の動き	竹田五郎		同時選挙を終えて
1986年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	高齢者の痴呆について 一いわゆるボケ症状とは一
1986年8月	6		川久保太郎	東京都連会長	沖縄研修に参加して
1986年8月	7		佐藤康代		妻の眠から見た自衛隊
1986年8月	8		原圭助	広島県連事務局長	広島原爆忌 内外から五万人参列 平和宣言 核廃絶の願いこめて
1986年9月	2	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	防衛費一%枠の撤廃へ
1986年9月	4		吉原瑞穂		防衛駐在官が見た中国の防衛態勢 垣根の無い軍隊 (3)
1986年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	「しびれについて」一背後に潜む多数の疾患一
1986年9月	5		山岡佳年	山梨県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年9月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	加給年金の加算
1986年10月	1		江崎真澄	会長	平和への指針を 江崎会長東京セミナー開講あいさつ
1986年10月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	禍根を絶つこと
1986年10月	4		吉原瑞穂		防衛駐在官が見た中国の防衛態勢 垣根の無い軍隊 (4)
1986年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	手足の「ふるえ」一特にパーキンソン病について一
1986年10月	5		堀川久	福井県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1986年10月	6				予備自衛官の声を聞く 中央研修会 出席者の懇談会
1986年11月	2		吉原瑞穂		防衛駐在官が見た中国の防衛態勢 垣根の無い軍隊 (5)
1986年11月	3		青山基三	副団長	成果あげた米国防研修 陸軍協会年次総会にも出席 国防総省等を訪問
1986年11月	3		鈴木敏通	研修団長	「米国防研修」随感
1986年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	血液の痛=白血病 一近年に於ける治療学の進歩一
1986年11月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	制度改正後の年金について
1986年12月	3		青山基三	研修団副団長	続・米国防研修報告
1986年12月	4		吉原瑞穂		防衛駐在官が見た中国の防衛態勢 垣根の無い軍隊 (最終回)
1986年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	血尿について 一常に尿色の観察を一
1986年12月	5		佐藤仁一郎	大分県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年1月	1		江崎真澄	会長	新しい防衛議論を 江崎真澄会長が新年所感

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1987年1月	2		栗原祐幸	防衛庁長官	新年のごあいさつ
1987年1月	3		森繁弘	統合幕僚会議議長	新年のごあいさつ
1987年1月	4	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	昭和六十二年の展望
1987年1月	7		高橋春男	函館支部連副会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年1月	7		町田宗宏	陸将補	日米共同統合訓練の現状
1987年2月	2				国防部会に設置 自衛官の年金問題小委員会 堀江委員長インタビュー
1987年2月	2	時の動き	原徹	隊友会副会長	62年度防衛予算を評価する
1987年2月	4	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	新制度の遺族共済年金
1987年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	頭部外傷について 一意識障害は重要な指標一
1987年2月	5		藤岡博	三重県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年2月	6		布野美美夫	隊友会島根県連事務局長	出雲の神が結んだ中国留學生の結婚 親代りは島根県連会長夫妻
1987年3月	3		田村豊	元海将、海上自衛隊幹部学校長、隊友会研究グループ会員	防衛問題 Q&A (その一) SDI について
1987年3月	4	時の動き	大賀良平	隊友会副会長	虚妄の“防衛費一%” 軍事大国化歯止め論
1987年3月	4		小舟進夫	奈良県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年3月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	恙虫(つつがむし)病について 一「死の風土病」が復活か一
1987年4月	2	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	中距離核戦力の削減交渉
1987年4月	3		近藤博隆	元空将、統合幕僚学校長、隊友会研究グループ会員	防衛問題 Q&A (その二) 抑止力について
1987年4月	3	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	遺族厚生年金とその併給
1987年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	肝硬変について 一その 1/3 に肝臓を合併一
1987年4月	5		桑原三郎	群馬県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年4月	7	連載	植村英一		インド雑感
1987年5月	2		吉沢渉	関東第一高等学校数学担当教諭	心豊かな国際人に 若い自衛官諸君に期待
1987年5月	3		福岡宣雄	元空将、幹部学校長、隊友会研究グループ会員	防衛問題 Q&A (その三) 電子戦について
1987年5月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	浮動票小論
1987年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	老人の骨折と骨粗鬆(しょう)症 一少ない日本人のCa摂取量一
1987年5月	5		中庭清一郎	茨城県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年5月	5	連載	植村英一		インド雑感
1987年5月	7		堀元	福岡県連副会長・兼築豊地区会長	各地支部の動き・声 末端支部の活性化と強化策こそ急務
1987年6月	2		渡辺	理事	会況報告
1987年6月	4	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	有事法制の整備を図れ 無視できない朝鮮半島危機説
1987年6月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	過去に受けた退職一時金等の取扱いについて
1987年6月	6	連載	植村英一		インド雑感
1987年7月	2	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	“二十世紀末を考えて”
1987年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	麻疹と風疹 特に成人の風疹について
1987年7月	7	連載	植村英一		インド雑感
1987年8月	1		江崎真澄	隊友会会長	終戦記念日の所感
1987年8月	4	時の動き	原徹	隊友会副会長	安全保障感覚の欠如
1987年8月	5		木嶋新八郎	岐阜県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	水痘と帯状疱疹 一両者は本来同じ病原体一
1987年8月	6				行動する隊友会へ連帯感深める仲間たち
1987年9月	2	基調報告	渡辺	理事	最近5ヵ年の会務概要と今後の運営構想
1987年9月	3		小崎武	宮城県連会長	中央研修会に参加して
1987年9月	4	時の動き	大賀良平	隊友会副会長	東芝機械のココム違反事件
1987年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	B型肝炎について 一結核にかわる国民病一
1987年9月	5		小城照美	千歳支部連合会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年9月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	幹部のほうが年金が安い？
1987年9月	6				スクラム組んで前進する仲間たち
1987年10月	2	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	複雑微妙な日ソ関係
1987年10月	4		松永力	常務理事	米国の幼年学校訪問記
1987年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	B型肝炎について 一前回補遺一
1987年11月	2		富岡幸雄	本部理事 千葉県連会長	セミナー聴講メモ
1987年11月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	情報化時代への対処
1987年11月	5		樺田資孝	宮崎県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1987年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	免疫の話① 一体液性免疫と細胞性免疫一
1987年11月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金税制改革の概要
1987年11月	6		村木杉太郎		自衛隊記念日にわが国憲法を思う
1987年12月	2				成果あげたアメリカ研修旅行
1987年12月	3				わたしの研修所見
1987年12月	5	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	FSX で日米協力の実を上げよ
1987年12月	6	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	免疫の話② ～B細胞とT細胞～
1987年12月	6		関九市	新潟県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1988年1月	2		瓦力	防衛庁長官	新年のごあいさつ
1988年1月	2				江崎会長から瓦長官へ要望書内容
1988年1月	3	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	新春展望 日米関係の再構築を
1988年1月	4		石井政雄	統合幕僚会議議長 陸将	年頭のごあいさつ
1988年1月	7		山口寛	長崎県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・
1988年1月	7	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	免疫の話③ 一免疫異常と疾患一
1988年2月	2	時の動き	原徹	隊友会副会長	ペレストロイカ
1988年2月	5		佐藤真爾	福島県連会長	府県連会長のズバリ提言 隊友会の強化・前進のために・・・

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1988年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	自律神経失調症について 一素質的要因と精神的ストレス一
1988年2月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	新税制と年金の源泉徴収
1988年3月	4	時の動き	大賀良平	隊友会副会長	日本有事の時の米軍来援を円滑にするための研究
1988年3月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	花粉症について 一特にスギ花粉の場合一
1988年4月	4	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	防衛論争の焦点
1988年4月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	本年度の年金スライドと年金の一部支給停止
1988年5月	2	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	OBたちの憂うつ
1988年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	熱傷(やけど)について 一特に子供・老人は危険一
1988年6月	2		松永	理事	会況報告
1988年6月	4	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	真の国際化のために
1988年6月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	夏の皮膚疾患 一シャワーの使用が有効一
1988年7月	2	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	米・中国の長期国際情勢判断
1988年7月	3		小崎武	宮城県連	本部総会所感
1988年7月	4	県連だより			各地で総会開く 連帯感深める仲間たち
1988年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	血沈(赤沈)の意義 一簡便な非特異的検査法一
1988年8月	2	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	防衛力の着実な整備を
1988年8月	3	連載	植村英一		フィンランドに旅して
1988年8月	4	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金額の改定通知と年金加入期間の確認
1988年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	ATL(成人T細胞白血病)一発癌とウイルス一
1988年9月	3	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	潜水艦衝突報道に思う
1988年9月	5		堀田耕三	隊友会大阪府連名誉会長	ニュージャージーを訪ねて・・・
1988年9月	6	連載	植村英一		フィンランドに旅して
1988年10月	1		竹田五郎	研修団長	米国防務旅行所感
1988年10月	2	時の動き	吉野實	隊友会副会長	外圧と国家戦略
1988年10月	3		松永力	隊友会常務理事	混乱続くビルマと日本の対応
1988年10月	4		宮沢作太郎	隊友会常務理事	ビルマ国軍の地位と役割
1988年10月	4	連載	植村英一	元空将	フィンランドに旅して
1988年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	高血圧 Q & A ①
1988年10月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	十月に於ける年金手続き
1988年11月	2	時の動き	鈴木敏通	隊友会副会長	世界の潮流と防衛
1988年11月	4				充実したアメリカ研修旅行
1988年11月	5				わたしの研修所見
1988年11月	5		久山辰治	本部理事	東京会場セミナー聴講メモ
1988年11月	6	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	高血圧 Q & A ②
1988年11月	8	読者のプラザ	塚田信一	韓国防衛駐在官	ソウルからの便り
1988年12月	2	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	ブッシュ米国防次期大統領選出さる
1988年12月	2		植村党輔	隊友会東京都総支部副会長	“天皇陛下のご快癒”を祈願 四十年前の感激、今も新たに
1988年12月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	高血圧 Q & A ③
1988年12月	6		工藤豊秀	予備一等陸曹	一ヨーロッパ視察に参加して一 自由と平和に感謝
1989年1月	1		江崎真澄	隊友会会長	新年のごあいさつ
1989年1月	1		江崎真澄	隊友会会長 衆議院議員	追悼の言葉
1989年1月	2		一宮真之	隊友会常務理事	大行天皇 87年のご生涯と思い出 ワシントンにお迎えして
1989年1月	2		星野亮	1へり団特別輸送飛行隊 1等陸佐	お召し機を操縦して
1989年1月	3		田沢吉郎	防衛庁長官	年頭のごあいさつ
1989年1月	3		大賀良平	隊友会副会長	ペルシャ湾視察記
1989年1月	4		石井政雄	統合幕僚会議議長	統合・共同を強化充実
1989年1月	4		寺島泰三	陸上幕僚長	全力を傾注して練成
1989年1月	4		東山収一郎	海上幕僚長	持場で全力を尽す
1989年1月	4		米川忠吉	航空幕僚長	人づくりを重点に
1989年1月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	味覚と嗅覚の障害① 一主として味覚について一
1989年1月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	今年からは年金も確定申告を
1989年2月	2	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	注目されるソ連の「新思考」外交
1989年2月	2		小柳坤生	徳山市	昭和天皇の思い出
1989年2月	3		中村守雄	元陸上幕僚長	スレ違いの「防衛」認識
1989年2月	4		味岡義一	隊友会本部参与	世界在郷軍人連盟総会に参加して
1989年2月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	味覚と嗅覚の障害② 一主として嗅覚について一
1989年2月	6		乗次修	北部航空施設隊本部班長 三等空佐	冬の北空、われらが支える 白い敵“雪”と闘う
1989年3月	2	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	防衛費を考える
1989年3月	3		鈴木敏通	隊友会副会長	「大喪の礼」に参列して
1989年3月	4		中島由美子	長崎市防衛協会青年部会	道標なき未知への挑戦
1989年3月	4	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金制度の改正について
1989年3月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	脳腫瘍について 一緩徐に進行する症状一
1989年4月	1		筒井良三	防衛庁技術研究本部長	研究開発の紹介 1 技術研究本部 技本の存在意義 潜在的抑止力として働く
1989年4月	1		松永	理事	隊友会の現況と平成元年度の主要事業 松永理事説明の要旨
1989年4月	2	時の動き	吉野実	隊友会副会長	責任分担論の今後
1989年4月	4		森本真章	福井工業大学教授	ソ連平和攻勢の真の狙い モスクワ放送に聴く
1989年4月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	脳腫瘍について 一前回補遺一
1989年5月	1				研究開発の紹介 2 技術研究本部 陸・海・空自衛隊の要求にこたえ新装備を研究、開発

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1989年5月	2	時の動き	鈴木敏通	隊友会副会長	経済と軍事
1989年5月	3				江崎会長を囲み勉強会
1989年5月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	糖尿病 Q&A ①
1989年5月	6				「隊友」アンケートの結果
1989年5月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	過去自衛隊期間の通算は？
1989年5月	7		竹田五郎	隊友会副会長	予備自衛官は予備役か
1989年6月	1				研究開発の紹介3 技術研究本部 世界が目撃する新戦車 装甲戦闘車・新小銃も開発
1989年6月	2	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	アメリカと中国の動静
1989年6月	4		棧熊獅	佐世保市長	日米友好の裏舞台 「青い眼の人形」と福永五月二海佐
1989年6月	7	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	糖尿病 Q&A ②
1989年7月	2	時の動き	三好秀男	隊友会副会長	激動の中国情勢
1989年7月	2		松永	理事	松永理事の会況報告
1989年7月	3				研究開発の紹介4 技術研究本部 潜水艦戦の主役 魚雷、ソーナーなど開発
1989年7月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	糖尿病 Q&A ③
1989年7月	8		園田恒明	東京都立本所高校教諭	隊員募集に協力を
1989年8月	1				研究開発の紹介5 技術研究本部 FS-XはF-16改 T-4、警戒管制レーダーも開発
1989年8月	2	時の動き	竹田五郎	隊友会副会長	自衛官の地位向上を
1989年8月	3		C・オット	大佐 在日スイス武官	中立スイスには軍隊が永久に必要 国防構想を検討中 今秋、軍撤廃の国民投票も 福島三馬訳
1989年8月	4	連載	中谷啓二郎	元一等兵曹	回想 海防艦「高根」の暗号長
1989年8月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	糖尿病 Q&A ④
1989年8月	6	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	過去自衛隊期間の通算について—補足
1989年9月	2	時の動き	吉野實	隊友会副会長	東欧問題と「世界に貢献する日本」
1989年9月	3		C・オット	大佐 在日スイス武官	中立スイスには軍隊が永久に必要 不断の防衛努力 国の繁栄に決定的に重要 福島三馬訳
1989年9月	4	連載	中谷啓二郎	元一等兵曹	回想 海防艦「高根」の暗号長
1989年9月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	糖尿病 Q&A ⑤
1989年9月	6				研究開発の紹介6 技術研究本部 地对艦誘導弾や短SAM(改)など開発
1989年10月	1	第13回海外研修	松永力	研修団長	肌で知る東南アジアと脅威に対応する防衛政策 防衛施策など学ぶ研修報告
1989年10月	2	時の動き	鈴木敏通	隊友会副会長	防衛の本質
1989年10月	2		篠崎嘉宏	研修団員	タイの近代化に驚嘆
1989年10月	3				研究開発の紹介7 技術研究本部 弾火薬・船舶の研究 自己鍛造破片弾も開発
1989年10月	3		黒田崧	研修団員	東南アジア各国の現状 シンガポールの国情と軍事事情
1989年10月	3		大塚瑞夫	研修団員	ちょっと見たインドネシア
1989年10月	4	連載	中谷啓二郎	元一等兵曹	回想 海防艦「高根」の暗号長
1989年10月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	糖尿病 Q&A ⑥
1989年10月	5	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	共済年金の一部支給停止について
1989年11月	2	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	一九九〇年代の視点
1989年11月	3				研究開発の紹介8 技術研究本部 防空の中核イーゼス艦や深々度掃海艦など開発
1989年11月	3		蒲田孔明	本部理事	セミナー聴講メモ
1989年11月	4	連載	中谷啓二郎	元一等兵曹	回想 海防艦「高根」の暗号長
1989年11月	4	提言	飯沢耕作	東北総連理事	三つの願い
1989年11月	5	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	いわゆるムチウチ症① —頭部症候群の一機序—
1989年11月	8		寺部甲子男	愛知県支連海上部会長	東南アジア研修報告
1989年12月	1				研究開発の紹介9 光と電子の研究 赤外線探知装置など開発
1989年12月	2	時の動き	吉田學	隊友会副会長	日本の安全保障上の責務
1989年12月	3	真相を求めて	安陪祐三		「なだしお」日誌改ざん報道について
1989年12月	3		寺部甲子男	愛知県支連海上部会長	東南アジア研修報告
1989年12月	4		及川勝明	根室支部長	支部長奮闘の記
1989年12月	4	年金ガイド	吉江誠一	隊友会相談役	年金改正について
1989年12月	5				会員の皆様へ 福祉事業の概要紹介
1989年12月	7	隊友のための健康相談室	堀田耕三	医学博士・大阪府連名誉会長	いわゆるムチウチ症② —治りにくい自律神経障害—
1989年12月	9		池畑秀穂	沖縄地連予備准陸尉	「防衛白書」を読んで

(注1) タイトル、署名、肩書、見出し未記載の場合は空欄としている。
(注2) 肩書は記事中のものを原文のまま掲載した。全て当時のものである。
出典：『隊友』1980年1月付～1989年12月付より筆者作成